2003 年

県内学校司書　実践報告会記録

富山県内で、小・中学校の図書館にかかわる専門の職員の方は、今年度で１２０名になりました。けれども、悪戦苦闘しながらの図書館運営のため､区域を越えての情報交換の場がないのが現状です｡そこで７月２４日(木)滑川市立図書館、２５日（金）砺波市立図書館で、婦中町と高岡市の学校司書による実践報告会を行いました。以下はその記録です。

「心の鍵を開けて―学校図書館司書３年間の取り組み」

婦中町立速星中学校　佐藤千雅子さん

私は「心の鍵を開けて」のタイトルにもありますけれど、この気持ちで３年間やってきたことを、お話したいと思います。

はじめに

まず、婦中町の図書館司書配置の経緯についてお話いたします。まず平成１２年５月から婦中町の各小、中２校、あわせて４校ですね。４校に学校図書館司書が配置されました。これは１校専任、週５日、月曜日から金曜日まで４時間勤務でした。午後１時から午後５時まで。これは実働、拘束とも４時間勤務で始まりました。平成１３年には、あとの小規模校４校が２人の勤務、１人が各２校兼務するという形で、婦中町１０の小・中学校全てに司書が配置されました。

実は、司書を入れるにあたって行政に働きかけるときに、ただ「司書を入れてください、お願いします」じゃなくて、わたしはボランティアで司書の活動をして、人が入った図書館というのはどう変わるかということを、実際、行政の人、教育長とか町長とか議員さんとか、そういう人たちに見てもらったんです。それしか自分たちのやるやり方が見つからなかったのです。

まあ一応そういう形で、行政が動いてくれまして、司書が入りました。２年目には１０校全部に司書が入る形になりました。それで平成１４年に、この兼務も解消されまして、１０人の司書が配置になりました。今年１５年からは勤務時間が、１時間延びまして５時間になりました。ただしこれは拘束６時間実働５時間という、実質的なところにいうとほとんど６時間学校にいますから､時給が減ったんじゃないのかなあと思うくらいですけど、朝１１時から夕方５時までの勤務です。

それと、あと今年の特筆すべきこととして、今まで勤務時間外に司書会として、月に１回テーマを決めて集まって学習会をしていましたが、公務に認められまして、勤務として月に２時間つくことになりました。さて、それは本当を言うと、自分たちの勤務時間内の１１時から５時までの間に行くかと思ったんですが、あくまでも子供たちが図書館を利用する時間には踏み込んでくれるなということで、月に１回だけは９時から１１時まで学習会をし、１１時以降はそれぞれの学校で仕事をするという、そういう形になりました。

このように婦中町というのは、司書配置がとても早かった所ではないのですが、毎年毎年変化があります。前進しています。こういうことは、行政側の学校図書館や司書に対する理解の深さと、各司書が、すごく日々がんばって働いているという努力が実を結んだものだと思っています。

速星中学校

婦中町の司書配置の流れっていうのは、こういう形なんですけれども、私の勤務します速星中学校の話をします。

本校は婦中町の中心部に位置しまして、東に神通川、西に井田川の清いせせらぎの中、北には婦中町の発展の礎となった化学工場を望んで、南を向きますと緑なす田んぼと山、とっても長閑な所だったんです。しかし、近年大型住宅造成が進み、宅地造成が進んで人口増加が著しくて、たしか、ご当地の滑川は市ですけれど、こちらよりもちょっと人口が多くなったんじゃないかと思います。それで、また大型ショッピングセンターの誘致なん

かがありまして、子供にとって刺激が多い環境に変わりつつあります。
　全校生徒は８３３名、２４学級、これは県下で第２番目の大規模校です。第１番目は堀川中学で、ダントツなんですけれども、あと第３番目に大沢野中学校で、だいたいこの３校が８００名近くの生徒数ですね。で、生徒は「信じあう心」をモットーに、４４年間の伝統がある無人販売、無監督テストの精神を日々の生活にも生かしています。
　無監督テストってご存知でしょうか。テスト始めるときに先生がプリントを配って、「用意初め」となると先生はもう監督をしません。職員室へもどります。それでもカンニングとかもなく、テストをやるんです。
　無人販売というのは、学校で必要な文房具なんかの販売を購買部が扱うんですけど、それも商品とお金を入れるボックスが置いてあって、そこにお金を入れて商品を持って行く。これも差額、というのは現物とお金との差額なんですけど、それをなくす、時々事故はあるんですが、それも子供たちの声かけでなくなる。今、差額１００日続いています。そんな風に、みんな信じあおうという心をすごく持っている学校なんです。
　あと挨拶がすごく良くてですね、廊下で行きかうと、必ず「こんにちは」朝なら「おはようございます」の声がかかります。これにあたりまえになっていると、たまによその学校に行って、生徒とすれ違って、すうっと無言だとさびしいんですよね。実際、速星中学校の卒業生が高校に行って、元気良くいつもの通り「おはようございます」といっても、相手が無言で返されてしまうと落ち込むそうです。それくらいに、うちの学校ではお客様に対してでも、非常に元気な挨拶を交わせます。そういう元気な生徒たちがいる速星中学校です。

学校図書館

それでは、その中学校の私が仕事をする現場、学校図書館はどういう所か、ということをお話します。
　本校の学校図書館は広さ１８８平米、約５７坪、だいたい考えたら３ＤＫのアパート２つくらいかなと思います。このフロアーにテーブルが８つ、座席数が４０、あとブラウジングコーナーを作っていまして、それとこの５７坪以外に書庫もあります。ビデオ資料の集団視聴用に、大型テレビも置いてあります。また、専用のパソコンは、司書の事務や、あとインターネットを利用した公共図書館の蔵書検索、学校図書館にない資料を検索するときの、資料検索用に活用されています。これは、生徒には一般には公開していません。基本的に司書が使っています。蔵書数は約一万冊。今、とても明るくて子供たちはとても親しんでくれています。昼休みはだいたい１００人前後、通常１００人前後、夏場になってエアコン入りますと、この間は１４０人入っていました。
　この図書館は、平成１１年の夏の校舎増築の折、新設されました。それまでは、近年の急激な生徒数の増加に伴って、一般教室が足りなくなっていて、図書館もつぶして一般教室にして、それで、隅のほうにあった一般教室の半分のスペースを図書室としていたんです。ですから、とてもそこで調べ学習するとか、授業に使うという状況ではなくて、本置き場というかんじだったそうです。私は実際はその現場を見ていないんですけれども、ちょうどとても本好きな上の娘たちが学校にいる間で、その娘たちが「学校の図書館は使ったことがなかったと、存在すらしらなかった」と、言っているくらいですから、相当なものだったんだろうなと思います。
　それで平成１１年の新校舎増築で、新館ができました。新館に本を移動するときに、先生方お手上げ状態だったそうです。「どうしようか」と、「このいっぱいの本どうする、こんな古い本もあるし」と、そういう風に困っていたときに、実は、私は小学校の方でボランティアをしていたんですよね。それを校長先生が聞き付けて、学校のほうからお願いするとお金を払わなくっちゃいけないから、何とか小学校の方から言ってくれないのかなあみたいな風向きもありまして、私はそのとき小学校にも子供いましたけれども、中学校にもいましたので、我が子のためだと思いまして、中学校の司書活動のボランティアを申し出ました。それで、そのときに、図書の廃棄基準などを参考にして３０００冊ほどの本をよけて、７０００冊ほどを書架にいれて、新しい図書館をスタートさせました。このあと整備が終わった平成１２年の春から、正式に学校図書館司書として赴任して、私の司書活動がこの新しい速中図書館で始まることになるんです。

図書室から図書館へ

　次に、図書室から図書館へ。これは、平成１３年に北信越学校地区図書館研究大会の発表校に指定されたんです、うちの学校が。それで、ちょうど図書館も新しくなって環境もよくなった、選任司書も配置されたし、ゆっくり研究ができるだろうと、条件がそろって研究テーマを「情報センターとしての図書館運営」こういう風にしまして、１年間研究しました。そのときは、校務分署で図書担当になった二人の先生と私の３人のグループ研究でした。このときにやっぱりただ３人が何かやるんじゃなくて、学校中を巻き込まないとだめだよということで、

学校内にいろいろ分散していた図書資料や、視聴覚資料なんかも、全部図書館に集めて一括管理しまして、それを管理者がいるということは活用できますので、有効活用して、その状況を報告しました。また、そのあと校長先生とか教頭先生と話し合う機会がありまして、速中の知識の中枢として機能させる意識づけ、完全にまだなっているわけではないのですけれども、その意識付けのためにちょっと本置き場のイメージが強い図書室から、図書館と名称を変更することにしたのです。一文字の違いですけれど、ここに含まれている意味は、私は大きいと思います。私は非常にこだわっています。本当に今は蔵書数も少ないですし、データベース化もなっていませんし、私は、うちの図書館の蔵書は私のカンピュータで管理しているんですというくらいに、佐藤がいないと本がどこにあるかわからない、これじゃ本当に機能していると言えないんです。けれども、いずれそうなることを目指して、図書館と呼ぶのに恥ずかしくないものにするという目標をもって、先に図書室から図書館という風に名称を変えました。そして、今も努力中です。

心の鍵を開けて

そういう速中図書館で私がモットーとしていることは、心の鍵を開けてということです。皆さん、学校って鍵かかっているところが多いと思いませんか。皆さんの学校の図書館はどうでしょうか、鍵かかっていますか。うちの学校の場合はあちこち鍵がかかっているんです。先生方が教室移動するときは、マスターキーをジャランジャラン持って移動するという、そういう世界なんですよね。何でこういうことをするのかと、結局管理のためなんですね。管理のために、図書館にも鍵がかかっていました。鍵がかかってると、入りたくても入れません。入ろうと思うときに、ガタッと開かない状況というのは生徒を拒否しています。この図書館に鍵をかける、図書館の鍵というのは私にとっては、生徒の読書意欲にも、鍵をかけていることだなと思いました。

たしかに勝手に入り込んで図書館を荒らすとか、授業をサボって図書館に隠れるとか、、隠れてタバコを吸って火事になったら困るとか、そういう管理者側の気持ちもわかります。実際に私が入る前の本置き場となっていた、教室の半分しかなかったというその図書室は、管理者がいないせいですけれども、ひどかったそうです。書架というのは、大概あっちとこっちと本が入っていて、中が空洞になっているそういう書架があるんですけれども、向こう側から本を押すんですって、そうすると自分の向こう側に本がポーンと落ちる、それが楽しくて全部やるとか、そういう愚にもつかないことをやってくれていたそうです。やはり、それを直す人もいないですし、しばらくはその状況でした。荒れたところにいると子供は荒れます。それを最大限に防ぐためには、鍵が必要だったみたいです。

思い出せば４年前の５月、役場で辞令をもらって速中に赴任して、図書室でわたしも鍵をもらいました。事実、今も鍵はかけています。私がいないとき。これはどう思おうと学校という組織の中で、学校の方針がありますから、そこまでは曲げられないんですけれども、そこで鍵をもらいまして、私は自分の図書館の鍵を開けました。正式な採用をする前、ボランティアで３ヶ月ちょっと速中に通っていましたから、もうその中身がどうなっているかよくわかるんですけれども、鍵を差し込んだ瞬間というのは、『秘密の花園』のメアリーの気持ちです。なんか、どきどきどきしたんですよね。これから、私の何かが始まるという。

その日、鍵を開けて、カーテンを開けて、電気をつけたとたんに、３年生の生徒が飛び込んで来たんです。その子達は、５月から卒業するまで常連でした。欠席する以外、毎日来ました。毎日来て何したっていって何もしないんですけれども。本一冊読んだわけではないんですけど、いろいろ別なことをしてくれまして、それは、いろいろ泣かせられました。けれども、少なくともその日から本当に毎日来て、常連さんの第１号になってくれました。

親しめる図書館への取り組み

全体として図書館に関する認識とかは低いんです。図書館イコール堅苦しいところとか、勉強しなくっちゃいけないところ、読書しなくっちゃいけないところという、そういう敷居が高いところに思われていました。ですから、まず１年目は、図書館に対する意識のバリアを取り払おうを第一の仕事として着手しました。

①雑誌とマンガの導入

具体的には、親しめる図書館の取り組みとして、まず雑誌の導入をしました。それまでも図書館には、一応開かずの図書館とはいうものの予算がついていましたから『こどものかがく』とか『ニュースがわかる』という雑誌を購入していました。しかし読まれた形跡はありません。確かにこれは学習に関係するものですから、なんか

こう働きかけがないと手には取られないんですね。そこで、子供たちに非常に関心があったファッション雑誌の『メンズノンノ』と『ニコラ』を加えました。何種類かこういう子供向け、中高生向けの雑誌のうち、これは純粋なファッション誌であって性描写とかがいっさいないということを、上のほうにはアピールしまして入れました。

次はマンガの導入です。学校にもそれまでも漫画は入っていました。『はだしのゲン』と『サザエさん』と『日本の歴史』という学校図書館の漫画の王道を行くって感じのものです。これ以外に、なんか読んで感動を共有できて、それでもって生徒に支持されるものを入れたいと思って『スラムダンク』『帯をぎゅっとね！』『め組の大吾』『パスポート・ブルー』などを入れました。でもね、図書館に漫画ということに対しては、先生方にものすごい反発を受けまして、「なんでだ」とか言われたんです。でも、その先に校長先生、教頭先生に納得していただいて、どの先生にも私の思いを伝える必要があるなと思いまして、職員会議のときに時間をもらって、「漫画といっても、悪いものは悪いんだけど、それを選ぶのが司書の力だし、絵も芸術作品になっているものもある。絵と文章で一つの作品なんだから、このひとつの漫画をつくるために、その作家はこれだけのいろんなリサーチをしている、こういう風に深めたものを考えているんだ」と説明しまして、理解を求めました。実際、この雑誌を入れたこと、漫画を入れたことで、先ほども言いましたけど、毎日１００人以上の生徒が来てくれます。もう手垢で真っ黒です、漫画は。

一気に入れたわけではないのですけれど。雑誌の『ニコラ』と『メンズノンノ』はちょっと管理者が変わった時点で、やっぱりこれはまかりならんということで、これは１年間だけでそれ以降は購入できていません。で、この３年前の雑誌を今でも生徒は喜んでみています。なんかかわいいもんです。あと、『ニュースがわかる』とか『こどものかがく』、『切り抜き速報』というのは　調べ学習にとても有効なので、私はとても楽しみで買っています。あと『モエ』は、あんまり出ないんですけれども、一部文芸部とかが喜んでみるので入れています。

漫画が、はっと思って、私も書き出してみたらなんてたくさん入れたんだろうと、自分でもびっくりしました。書架にして６段分ありました。新規購入の中の『スラムダンク』、は、ものすごい支持されています。こういう漫画関係は本の装丁が甘いので、もともと図書館向けになっていませんから、ページが落ちたりするので、事前に大型ホッチキスで前と後ろから打ち込んでおくのですね。それをしてから、カバーをかけてブッカーで製本します。それをしておくと、ページが落ちることもなくてずっと使えます。

たくさんある漫画の本ですけれども、１冊もなくなっていません。というとちょっとうそになって、実は４冊なくなっています。『ブラックジャック』１冊と『いたみ』『めまい』『なみだ』です。この４冊は私が赴任した当初、いろいろ泣かされたという、別にその子達じゃないんですけれども、その学年の子たちが、持って行ったきり帰ってこないのです。でも、それ以外は１冊もなくなっていません。貸し出し禁止にしていることもありますけれども、先ほど申しました速中の信じ合う心、自分が好きなものはみんなも好きなんだから大切にしようというのが、ここでも生きているんだなあと思います。その手摩れのした漫画の本が全部そろっている姿とか、本当に真っ黒になっている本を皆さんにお見せしたいです。一応そういう感じで、漫画によって図書館の敷居の高さというものが、少し取り払われたと思います。

次にそれと平行して、何も漫画を置いたから、それで１００パーセントいいというわけではありませんし、もちろん新しい普通の本、読み物なり研究資料なんかの本も、どんどん新しくはしています。

②環境整備

自由なスタイルでの読書ができるようにブラウジングコーナーを設置しました。これは、ソファを置いて本当にリラックスして本が読めるようにしています。あと、座席が４０しかありませんので、１００人から来ると、１年目はみんな床に座っていたんです。図書館の隅のほうで、子犬がじゃれて集まるような感じで、ザーッと寝っ転がって、なだれかかるようにして集まっていました。そういうグループが何箇所もできていて、それはそれでいいんですけれど、「うーんできたら何かベンチがほしいな」と思いました。木製のベンチを６個作っていただきまして、あと長ベンチ、これは前後背中合わせに座ると、５、６人座れるものを作ってもらいました。丸テーブルも作りまして折り紙やお手玉の本を書架から抜きまして、そこに折り紙とか、あと私が作ったお手玉、を置いて、楽しめるようにしました。

お手玉も非常に人気でして、時々キャッチボールなんかして、お手玉割っちゃったりする馬鹿野郎がいるんですけれども、初めは２個しかできないのが、３個４個と挑戦するという子もいます。先生方が「何でこんなものあるんだ」と言われると、私は「いや、これは意識の集中のためいいんです」と何でもこうこじつけて言うんで

す。綾取りも「指先の訓練のためにいいんです」、折り紙もきちんと折れる子は、数学の、特に図形関係が強くなるんですとこじつけて置いています。

丸いテーブルというのは、高さ５０センチぐらいの割と小ぶりの電気工事用の木製ドラムをもらってきまして、テーブルクロスをかけています。そうするとお金使わずに、角が危なくなくって、かわいいテーブルができます。そのひとつには、折り紙とか置きまして、もうひとつには、『心を元気にしてくれるときのことば』とか刺繍の本などの小さい本を置いています。ああいうのって書架に入れちゃうともう、隠れちゃうんですよね。、べらっと平置きにしてもかわいくなかったんですが、丸いところに丸くつなげる様にして置くと、気持ちがやわらかくなるコーナーとして受け入れられています。誰かが必ずくしゃくしゃにしても、誰かが直してくれていて、常に人に触れられている場所なんだなと思っています。

ぬいぐるみとかパペットとか置いておくと、ざこつけない男の子供が喜んでいじっているんですよね。それでどうなんだと言われちゃったら、どうなんだ、なんですけれども。私は何でもいいから、学校は、特に中学校になるといろいろ生徒たちは日々厳しいことを言われてきています。ですからせめて図書館でぐらいは「えへっ」とできる、「えへっ」がダラダラになっちゃうと困るんですけど、気持ちをほっとできるものが、なんでもいいからあればいいかなと思って置いています。

環境整備というのはお金がかかります。いろいろ欲しい物があるんです。私はおねだり佐藤で通っているんですけど、しかし、図書館に与えられた予算というのはわずかです。うちの場合は図書室として約５０万、それ以外に消耗費としては５万です。これは婦中町の小中１０校、いろいろあるんですけれど、一律５万円なんです。５万円ではブッカーを買っておしまいです。ですから他のもの、どうにかして大きなものを買いたいなと思うときには、ほかのお金を引き出すために、常に、校長先生、教頭先生に「あれ欲しい、これ欲しい」ということを訴えているんですけれども。

あとは、お金をかけずに環境整備をしようということで、学校の中、外ではさっきの木製ドラムもそうなんですけれども、「なんかないかな、なんかないかな」と探しています。本屋さんに行って、タイトルを立てるスタンドなんかもありますよね。ああいうものも、ある閉店する本屋に行って「すいません、これください」といって、何十ももらってきてみたり、もういろんなことをやっています。

本屋さんが持ってきた見本の辞書というのは、本屋が回収しても役に立たないそうで、そういうのを貰い受けました。最初は図書館の８つあるテーブルに、ひとつひとつかごに入れて置いたんです。生徒は、図書館で勉強してたりして、しょっちゅう字を聞きに来るんですよね。うちは授業用に、英語の辞書とか国語の辞書をケースに入れて、持ち運びできるのをたくさん用意してあるんですが、そこからいちいち出して渡していたり、書架にある大きい辞書を渡したりするのも大変です。それに、そこまでさせると子供は、「ああいいや」っていうんですね。もう待つことができない人たちですから、聞いてすぐ答えてあげなくちゃいけない。そんなときにテーブルに辞書がすぐあったら良いなあと思って、そういう見本でいただいていた辞書を４冊ひとセットにしてテーブルの真ん中に置いています。「お助け辞書」っていいます。

自分たちが勉強しているときにちょっとわからない言葉、わからない単語をそれですぐ調べるようにしています。そういう辞書を買っていたらお金がないので、もらい物を利用しています。そうしたら、それを見ました先生方が「こりゃいいもんだ。各教室にも欲しい」と言われました。すると各教室に４冊づつ２４学級ですから、２４、５万かかるんですよ。「そんなに買えません」って言っていて思い出したのが、本屋さんです。「もしもしもし本屋さん、各学校から集めてきてください。見本の本を」と、佐藤が連絡しました。各クラス４冊づつの辞書セットをそろえました。

だから、とってもおねだりでいろいろやっています。本当に生徒が知りたい時の知り時って思うんです。だからこれはこの辞書に関してだけじゃないんですけれども、いつも疑問を即解決できるという体制をとってやるということが、漫画を読んで楽しむだけではなくて、勉強するにも気楽に使える、楽しめる図書館のひとつじゃないかなと思っています。

またさっきおねだりおねだりって言っていましたけれど、金額のかさむ備品というのは長期展望で、手に入れています。１回言ってもらえるものだと思っていません。常々「あれがあると良いな、これがあるといいんだ、あれ欲しいな、これ欲しいな」って顔見るたんびに言っているんです。そしたら学校っていうのは、卒業記念品だとか、不意な寄付金、ＰＴＡのバザーの収益金の寄付金とか教育振興会からのお金とかって、割とまとまったものを買うっていうお金があるみたいなんです。そういう時に、やっぱり言っていると関心もたれますし、「ふうん図書館ってそういうものがいるのか」って思ってくれますから、知らない人にはアピールして訴えます。

そこで、うちは文庫本と新書本の木製の円形書架が、建具屋さんに作ってもらって３基、平置きで本を展示する展示架１基あります。展示架は、キハラのだと３段なんですけれども、中学生結構大きいですから、３段じゃ低いなあと思って４段ある展示架を作ってもらいました。ベンチも木製で、うちの図書館はやわらかい雰囲気にしようということで、木製で全部統一してあります。こういう大きなお金が動くときに、出入りの木工店に作ってもらうという、おねだりの成果が出ています。

③生徒リクエストの本

読書につなげるために、リクエストカードで生徒の声を汲んだ図書の購入に努めました。でも、最初生徒のリクエストを受け入れると、私自身の読書傾向の問題もあったんですが「何じゃこりゃ」みたいなものがありました。ヤングアダルト系というのかな、ジュニア、『ティーンズ文庫』とか、『ファミ通』とかは、漫画に毛の生えたようなという感じで、私はふるいにかけていたんです。そうすると、ほとんど生徒のリクエストというのは、組めなかったんですよね。ですけれど、私がこれがいいんだと思って並べた本は、あんまり反応がないんです。そして、ふるいにかけて残った、そういう本でも、生徒が支持した本というのは読まれるんです。これを思ったときに、思い切って、やっぱり、私はもう四十何年間生きている感覚でしかものを見れていないんだから、生徒の目線に立って考えてみようと思って、この春からは、その枠を取り払いました。ただし一応チェックをして、よっぽどひどいものはリクエストした生徒に対して「ごめん、これはちょっと置けないわ」と理由を話して却下するものもあるんですけれども、ほとんど取り入れました。そしたら、ものすごく貸し出しが伸びまして、じゃリクエストされた本だけが、借りられているのかと思うとそうじゃなくて、自然と私が入れた本、もしくは以前からあった本もいっしょに引っ張られていくんです。生徒が自分たちで決めた本、リクエストした本が呼び水になって、ほかの本も読まれるようになりました。

あと、リクエストに答えるということは、生徒と私との信頼関係も生まれてきたんです。図書館に来る子、いろんな子がいます。私は成績をつける人間ではないので、生徒が何番目とっている子だとか、何点とっている子だとかは知りません。図書館に来る一生徒としか見ていません。もしかしたら教室なんかでは、ぜんぜん声をあげれない子だったのかもしれない彼のリクエストを受け入れたときに、「えっ、本当にこれ買ってくれたが」といって、すごく喜んで、その子はそこからすごく活発に本を読むようになって、会話も増えてきました。それがひとつの例だけじゃなくて、たくさんそんな風にリクエストに答えるということは、その子を認めてあげるということにつながってきたようで、何か一歩前進があったなあと思っています。

④レフレンスの努力

読みたいときが読み時、知りたいときの知り時といっしょなんですけど、読みたい時が読み時というのを、私はモットーとしています。ですから、生徒のレファレンスには、短時間で的確な資料の回答に努めています。これは私は「クイックレスポンス」と自分で銘打っているんですけれど、なるべく即答する。お昼休みに受けて、そのときになかったら「ごめん放課後までに調べておくし、そろえておくから放課後もう一度来てね」と言って、うちは幸いなことに公立図書館が学校の隣にありますので、生徒が休み時間終わって授業へ去っていったあいだに、ちょっと出かけまして、本を借りたりもやっています。

こういうことも、リクエストで生徒の気持ちを汲むということと同じように、当てにされ、信頼される図書館と司書の位置づけのポイントだと思っています。

そうするにはやっぱり自分の図書館、あと私の場合は隣接する町立図書館の資料を知るということも必要だなと思います。何か「これ、何とかいう本ないけ」と言われてさーっと出せるというのは、とっても私は楽しくて「どうだ」見たいにやるんですけれども。時々ね、そこに自分体運ばずに、「うん、そこの何段目のそこにあるから」とか言うんです。私は毎日見ているからわかります。でも生徒は「えーっ」とか言って、それまでは図書館にいるおばちゃんだったのが、ちょっと違う人に見てくれる、その瞬間がもう最高です。

⑤オリエンテーションの実施

正しい図書館の利用方法と、あと学習の仕方、私が一番訴えている心のオアシスとしての図書館の役割、これを理解してもらうために、オリエンテーションをしています。

まず、赴任一年目は、オリエンテーションした１年生と、してない２年生、３年生との図書の貸し出しに非常に差が出ました。これが、数字で表すとやっぱり理解を得やすいので、オリエンテーションを続けてさせてもら

う布石になりまして、翌年からは必ずさせてもらっています。ただし、本当いうと全学年に、毎年したいんです。ですけども、今学校現場は授業数の縮小で、どの教科も勉強の時間を確保することにやっきになっていまして、なかなか図書館指導ということに、１学年、１クラス１時間もらうことは難しくっています。しかたないので、少なくとも一年生だけお願いします。入校オリエンテーションといって、入学式から１週間から２週間の間、通常の授業ではなくって、１年生はいろいろなことを学習する中の一環として、図書館学習という形で入れさせてもらっています。これで一巡しまして３年間、今年で４年、今年卒業した子が初めてオリエンテーションした子になりました。やっぱり、オリエンテーションすることで、図書館利用のことが徹底したので、貸し出しとか、利用、あとバリアのない図書館、心のオアシスである図書館ということを生徒が良く理解して、自分たちで図書館を楽しむ子たちになってきているんじゃないかなと思っています。

⑥先生への働きかけ

このオリエンテーション実施も、私がかってにできるわけじゃなくて、先生に働きかけてるわけなんです。漫画を置いて、楽しんで遊べて、リラックスできて、それだけでは学校図書館としては片手落ちですから、やっぱり授業で図書館を利用してもらうというのも、大きな目標のひとつです。そのためには、こまめに先生に声をかけて、資料を先手を打ってそろえるようにしていました。さすがに先手を打つというのは、１年目は難しかったんですけど、２年目、３年目になりますと、レファレンスを受けたときのレファレンス記録とかありますから、それをときどき見直して「あっ、去年の今頃こういうことをしたな」と先へ先へと資料をそろえるようにしておきます。先生からの声かけを待つんじゃなくて、「先生、先生、そろそろなんとかの単元ですね。使いませんか、去年使ってくれたし」と、にじり寄って「使おう、使おう」とやるんです。そうすると、一度使って気に入ってくれた先生は、やっぱりよく使ってくださいます。で、使ってくれると私も資料を新しく入れようと関心がもてますから、その教科に関する資料も、非常によくなるんですよね。そればっかりやると資料のバランスがくずれますけれども、やっぱり生きている資料使いたいので、そういうふうに先生に声をかけることで、図書館が生きてくるんですということを訴えています。

⑦学習に関する支援

この先生の働きかけと連動するんですけれど、学習に関する支援として特設コーナーを設けて、それに関するブックリストなんかも発行しています。これは最初は私がやっていた勝手な仕事だったんですけれど、教師のほうから「特設コーナーを作ってください」とか、「ブックリストを作ってください」っていう依頼が来るようになりました。これは先生方も忙しいので、突然に「あと三日後ぐらいまでに」とかいわれて非常に苦労はするんですけれど、うれしい苦労だなあと思っています。また、総合的な学習のためのオリエンテーションや新聞を使ってのＮＩＥ、学習に進め方のワークシートの作成なんかも依頼されました。「ちょっと待てよ、これは教師の仕事じゃないかな」と思うんですけど、こうなんとなく断っちゃったら、せっかく先生が私を信頼して言ってくれているんだから、よしこれも一種の資料提供だと、自分で拡大解釈をしましてやりました。だから、うちの娘は私が作った指導要領にそって授業を受けています。「どうだ」と思うんですけど、そんなのもしています。

⑧たよりの発行

たよりはブックリストなんかとは別なもので、私は『本の虫』という名前の便りを、不定期なんですけれど発行しています。この『本の虫』っていうのは、生徒が家に持ち帰って、生徒の家族の目にも触れますから、私は親子読書しましょうということを提唱していますので、読書の関心も親にも伝わりまして、親がその『本の虫』を読んで「あ、この本読んでみたいわ。あんた、借りてきてよ」とかいって子供に借りに来させる、という状況も生まれたりしています。そこに、ちょっと小さくエッセイを載せているんですけど、それを楽しみにしてくださる保護者の方もいらして、そういう声をかけてくれると、「よしがんばるぞ」って気にはなるんです。ただなかなかよく出せなくって、毎月発行したかったんですけれども、最近は本当に学期１回の発行で、ちょっと、滞っています。これは、これからどんどん図書館を外にアピールするためにも、便りをしっかり出さなくっちゃいけないなという、私の大きな目標の一つです。

⑨図書委員のかかわり

委員会というのは司書にとって大きなエネルギー源なんです。１人では大変な作業である館内掲示だとかは、

子供たちはとってもじょうずに、きれいにやってくれるんですよね。また、私が委員会の活動にアドバイスを与えて、生徒自身が委員会活動に対して達成感を得る。私が１人でやっても、やったことになるんですけど、生徒を使ってやったら、生徒は自分は図書委員会でこういうことをしたという生徒の成長の助けになるので、私がやっても生徒がやっても同じことなら、生徒にやらせようと思っています。こんな、裏からの支援をしています。

⑩おわりに

司書という今まで､学校の中にいなかった存在を受けてもらうためには､非常にたくさんの葛藤がありました。それも随分私は、学校という組織の中で、めちゃくちゃなことをしてきたんだなということを、最近入られた方が私に愚痴られたときに「そっか、あの時はああいう風に一生懸命だけれども、冷静な目で見ると、これは、ちょっと」と気づいて、思い出すと本当恥ずかしくなるようなことをいっぱいしてきました。

だけど、奉仕者、もしくはサービス業という司書の立場、これも４年目を迎えて、何か学校内にようやく定着してきたんでが、みょうにこの４月から私、仕事しやすかったです。それまでは、何か学校にいて、自分が学校に沿わない存在っていうのかな、そういう思いが常にあって、やりにくいところ、いっぱいありました。なんか職員会議も出れない、学校の様子もわからない。「こんなことで私になにせ」と思ったり、生徒の動向もよく伝わってなくて､「どういうことなの」といろいろ不満に思ったり､悲しく思ったりしたこともあったんです｡それも、なぜか今年春からスーッと溶け込めてきたんです。それは自分自身の思いの中で、肩肘張ったところがなくなったことと、学校側も私って存在がいてあたりまえっていうふうに、受け入れてくれているんじゃないのかなと、そう思っています。で、そういう思いが通じているのか、今年になってから、こっちから働きかけなくても、図書館や図書館の資料を使った学習の支援が、しょっちゅう舞い込むようになりました。

また、図書の貸し出し数も、年々伸びてきています。平成１２年度、最初、７００冊強でした、８００人いて、７００冊です。おみごとでした。なんか、毎日毎日、生徒たくさん来ておられますね、でも、借りられませんね、といわれるのが、本当に悔しくって悲しかったんですけど。

で、次、平成１３年度はその倍、１５４８冊借りられました。これはすごくうれしかったです。去年平成１４年度４月からは朝の１０分間読書って、巷ではやっているものをうちの学校でも導入させまして、そうしたところ、もう、すごく借りられるようになったんです。あと、新入生に対するやっているオリエンテーションも３年目になり､みんなが図書館を理解してくれたということもありましたし､また､リクエスト本を受け入れている、そういういろんなことが相乗効果をはたしまして、去年は３４１９冊の貸し出しがありました。

スクールライブラリー、これは教員養成セミナーって雑誌から依頼を受けまして、そこに原稿を寄せましたものなんですけれども、ここの写真で､『２００３年１月年間貸し出し数３０００冊到達の瞬間』というのがあるんですが、目標を決めましてカウントダウンしまして、そこの２９９９冊目を借りた人と、３０００冊の人と、３００１冊めの人には豪華商品が当たりました。実はこういうのを最初２０００冊目でやったんですけれど、軽くクリアしまして、そしたら景品もらえることに味をしめた生徒が､「もう一回しよう。今度３０００冊にしよう」といって、去年はこういうイベントを２回しました。これも、私が言い出したらおもしろくないので、私が、裏で委員長にたきつけて､「委員長、こんなことしたらおもしろいよ」といって、委員長の方から、先生の立案という形で、生徒会にかけまして発表しました。

それで、こういう風に伸びたんです。今年はどうなることかなと思ったら、４月から３ヶ月で、もうすでに１３００冊の貸し出しがあるので、今年は４０００冊行くぞと楽しみにしています。

図書館の運営というのは、皆さんも十分わかっていらっしゃると思いますけれど、司書１人ではできません。教師や生徒を巻き込んでしていくことが大切だと思います。今年からは司書教諭の発令もされて、学校図書館というものに学校全体の関心が集まっている、そういうときに､「この学校図書館を作りあげていくものは、利用者である生徒や教師、あなたたちなのよ」ということ、私は訴えています。私はあくまでも管理者です。「あなたたちが作り上げる図書館を、サポートするのが私です」そう訴えています。で、いくら司書がよい資料やおもしろい本をそろえて、図書館を作り上げても、使われなかったら全然だめなんですよね、ですからよく機能させるときには、利用者の声を汲んで、必要とされる資料をそろえて、使ってもらうこれが一番だと思っています。

学習センターとして総合学習や各種教科の調べ学習に対する支援をするには、司書自身の資料知識、これがものを言います。さっきも言いました、私は図書館のカンピューターですと、学校図書館、自分の図書館の資料は全部把握しています。過分にちょっと誇大な広告があるんですけれども。

それに本に限らないあらゆることにアンテナを張り巡らせて､「こういうことだったらああいうことで調べられ

るよ」っていうことを常にわかるように、いろいろなことにチェックを入れています。私たち司書の仕事に、これとこれをしたら終わりということはないと思います。情報はどんどん変化していますので、司書と図書館は常に成長する努力が必要だと思っています。１人職場でつらいことや落ち込むことも多くあると思うんですが、こうして仲間がいてくれます。３年間私の活動を育ててくれたのは、私の仕事現場である学校だと思っています。でも、支えてくれたのは司書の仲間です。ですから今日、婦中町の司書以外の新しい仲間にあえたことはとってもうれしく思いました。これで私の実践報告を終わります。

「明るい親しみのある図書室をめざして
―学校図書館司書３年間の取り組み」

婦中町立速星小学校　北島　千加　さん

私自身司書の仕事が初めてなものですから、本当に手探りでやってきました。他の皆さんの助けを借りながらやってきたので、とてもえらそうなことはやってきていないんですが、３年間わたしのやってきたことを発表したいと思いますので聞いてください。

速星小学校の概要

速星中学校、速星小学校というように、速星中学校とは歩いて１０分もかからない距離に、速星小学校はあります。そして小学校の学校区は婦中町のほぼ中央にあって、社会的機能という面では、多くのことが集中していて、交通の面においてもとても煩雑なところにあります。

学校の職員は全部で４２名、児童数は６０９名で２０学級あります。特殊学級がそのうち２級あります。学校の目標は「たくましく心豊かな子」ということで、自ら学んでかかわりあって考えを高めることができるよう、日々先生方が努力していらっしゃいます。

図書室の様子

学校の校舎全体はほぼH型です。で、職員室とか理科室などの特別室があるＡ棟といわれるところと、各教室があるＢ棟をつなぐ通路の２階にあります。Hの真ん中の部分の２階にあります。そして、広さは９５平方メートル、机が８つにいすが４つ、ひとつの机に椅子が６個はいるような、ちょっと大きめの机が部屋の中央に置かれていて、その周りを囲むように書架が設置されています。

そして図書委員ですけれども、教員２名と私、５、６年の児童１７名ということで構成されています。そして、私がこの小学校に来て、一応目標に掲げたことは、「明るく親しみのある図書室を作っていこう」ということです。そのことについての実践をお話していきます。

１年目の取り組み

１年目は、今お話いただいた佐藤さんは、司書のボランティアとして、速星小学校に入っていただいていたので、私は、他の司書の方より本当に恵まれた状態で入りました。他の方は掃除から始まったのですが、私は、ほぼ、佐藤さんがしてくれた土台の基に入っています。

そこでまずしたことは環境整備ということで、もっと明るく、親しみやすい環境を作ろうと思って、壁面を作ろうと思いました。壁面と言っても、本当にまわりが書架なので、ほとんど飾れるところはなかったのですが、とりあえずカウンターの後ろに、黒板があったのでその文字を全部消してしまって、そこに壁面を作っていく、壁面構成からはじめました。

そして入ってすぐ、今まで図書の貸し出しは台本板を使った貸し出しをしていましたけれど、それを図書主任の先生と相談してなくしました。でも、全部なくすと、混乱が生じるということで、クラスに１０枚だけ残して、１０枚は普通の貸し出しではなく、授業中どうしても使いたいときに、本を持っていくときに借りようというための台本版を各クラス１０枚だけ残して、貸し出しを始めました。貸し出しは、貸し出しカードのみの貸し出し

です。そして、５月の中旬ぐらいに赴任したんですが、そのころには、ほぼ本の購入なども終わっていましたので、私は特に先生が「何かありますか」って言われた時点で、リストを出して先生が注文するといったような、ほぼ先生まかせの発注の形がしばらく続きました。

図書室のイベントとしては、１１月ごろ読書週間があります。それに向けての最大の活動の中に加えさせていただきました。でも、図書委員会の活動というのは、図書主任の先生が主にされるので、私はほとんど聞いているだけの状態だったんですが、その時に、先生に「何かありますか」と言われて、その時ちょうど富山市の司書の方が研修しておられる「はるにれの会」に出席していて、図書のイベントについて研修してきていました。そこで、しおりづくりというのに興味を引かれたので、「しおり作りしたいんですけど」と言ってさせていただきました。

これは好きなイラストとか絵を紙に貼って、そしてそれにブッカーなどをかけて、穴を開けて、紐をつけるというものなんですが、このブッカーがけがとても大変で、昼だけのイベントなんですけども、終わってからも私は、もう一日中ブッカーかけをするような始末になってしまいました。そしてそれと同時に「何でもわからないことがあったら聞いてね」という形でフロアワークに努めて、「何でも聞いてもいいんだよ」ということを知ってもらいたいというので、うろうろ歩いていました。そんなこんなで、あっという間に１年が過ぎていってしまいました。

2年目の取り組み

どんなことをしたかというと、もちろん壁面は力を入れてどんどん作っていきました。季節の壁面はもちろん、初め、後ろの黒板と正面のガラス窓しか飾るところがなかったのですが、ガラス窓は、ちょうど正面玄関に位置する児童玄関の上にあるので、見苦しいということで貼れなかったんですけれども、１年目の時に、卒業する際に、結構ぺたぺた貼ったら何も言われなかったので、「こりゃいいのかな」と思ってここも使おうということで、なるべく外から見ても美しいような形で、考えて壁面をつけるようにしました。

そしてそれと同時に図書室に来て、どんな本があるのかということがすぐわかるように、見出し板を作りたいと思ったので、分類番号とちょっと絵をつけたような見出しを本に差し込んで、誰が見てもわかるような形を作りました。

そしてこの２年目の取り組みのメインは、オリエンテーションの実施ということです。このオリエンテーション、するほうもされるほうも生まれて始めての課題だったんですけれども、どんなことをしたらいいのかなと、いろいろな司書の仲間にお伺いしながら作っていきました。それでもオリエンテーションを実施するにあたっても、すぐ実施できたわけではありません。やはり、どういうもので、どういうことがしたいためにするのかということを、まずお話してから、職員会議にかけて説明してくださいということで、図書室の利用と機能についてということで、お話してから実施ということになりました。

その実施の内容ですが、だいたい低、中、高に分けて、図書室のマナーとか「本を読むだけでなく何時でも来ていいんだよ」ということと、それから図書室の本はラベルがついているということを、そのラベルのついている意味と、場所ということの簡単な説明と、それと本の借り方、返し方などを、低中高の学年にあわせてパネルシアターや紙芝居、ペープサートを使ったクイズ形式で進めていきました。

これは、やっぱり「１クラス１時間お願いします」と頼んでいたわりには、１８クラスあって、しんどいものがありました。そして思ったことは、やはりやることも内容も違うので、学年は時期をなるべくくっつけて、それもやる学年をくっつけるだけでなく、学年差がなるべくないようにしたほうがいいと思いました。というのは、やはり、やる学年によって準備も内容も違うので、頭の切り替えから何から大変だったので、なるべく近い方がやりやすいなあと思ったことがあったからです。

そして、そのオリエンテーションの時に、その中で「リクエストができるよ」ということで、リクエストＢＯＸなども設置しました。そして、この頃になると台本板はもういらないねということで、台本板は一切使わなくなりカードだけになりました。

予約サービスの開始は、こういうサービスを勝手にやるわけにはなかなかいかないので、図書主任の先生にお伺いを立てたら、「うちではまだ早い」といわれたので、オリエンテーションの時には説明しなかったのですけれども、カウンターにいると、子供たちが「あの本見たいんだけど」とか、「あの本、次見たい」とかいう声が多かったので、こっそりとひそかに始めました。したい子のクラスとか名前を聞いてノートに明記して、「来たらお知らせするね。また、来てね」という感じで受け付けていました。でも、すべての返却の本がカウンターを通るわ

けではないので、これも、なかなか困難を極めたので、なかなかスムーズには進まなかったのが、今後の課題ということで残ってきました。

そして、また、読書週間には図書のイベントがありまして、「今年もしおり作りお願いね」ということで「はあ」と思いながら、しおり作りをさせてもらいました。もうこの段階になると、しおり作りの張る絵柄も何かもの全部を私が設定して、それを差し出すだけの形になっていたので、「これでは、ちょっといけないな、もっと生徒と一緒に何かしたいな」とは思ってはいたのですが、そのまま終わっていきました。

１クラス１時間、図書の時間ということで、図書室利用の日というのがあるんですけれども、皆さんがその時間通りに来れるわけでもないし、来ても大体貸し出しがほとんど主で、終わってしまうことが多かったです。私がもっと読み聞かせしたいなと思っても、本を紹介したいなあと思っても、なかなか時間を取れなかったのです。ちょうど速星小学校には、朝、「お話の会」っていうのがありまして、そこに入れさせてもらって、これも一応ボランティアなるんですけれども、図書室で待っているだけじゃなくて教室に出向いて、本を読み聞かせるようなこともしてみました。この本は図書室にあるんだよと、ちょっとピーアールもして、帰ってきました。そして、この３月には、私はとても１人では蔵書点検はできないと思っていたんですが、図書主任の先生が「今年ならできます」と言われたので、蔵書点検をしてみました。

この蔵書点検の仕方も分からなかったので、とりあえず、いろんな本を読んだ中で、そのマニュアル通りにしたんですけれども、その方法というのは、やはり台帳と現物をつき合わせていったんです。やはり、ない本もたくさんあるし、捜すのも大変なので、私は大体部署は分かっていましたが、他の３名の先生にも手伝っていただいたんですが、なかなか本を探すだけでも大変だったので、それはやめて、まず現物の本を台帳から探すような仕方に換えて、３日間点検をしました。ないものには全部、台帳に付せんをつけていきました。そして、また番号もとってない本も沢山出てきたので、それは新たに番号をとったり、ない本はこれから行方不明の本として、多分もうなくなってしまったものが多かったので、廃棄処分をとっていった形で、どんどん進めていきました。実は今でもその処理がまだまだ残っているんですけれども、少しずつやっていこうと思っています。そんなこんなでまた２年がすぎてしまいました。

3年目の取り組み

校長先生がちょうど退職をなさったときに、「何かほしいものあるか」と聞かれたので、「面出しのできる絵本架が欲しい」といって、それを２ついただきました。本を面出しできる部分が２段と、その下に本が並ぶような形の本棚を２つ作っていただいて、後、もうちょっとおねだりして、本当に面出し部分だけの長い棚もできないかしらということで、ご相談したところ、それならそんなに費用もかからないからということで、いただきました。やっぱし、本は書架に入れてしまっては、なかなか魅力が出ないと思ったので、なるべく面出しできるようなスペースを作っていきたいと思っていたので本当に助かっています。

そして、その面出しできる部分に季節の本というコーナーを作って、季節の本の展示などをしたりもしてきました。

オリエンテーションはすんなり去年もやったのでということで、認めていただいたのですが、去年と同じことっていうか、趣旨は同じなんですが、全く同じことを言うわけにもいかないので、ま、いろいろ模索して考えました。

まず、やっぱり低学年は図書室に親しんでもらおうと思って、今度は読み聞かせや、パネルシアターなどを、中心にオリエンテーションを組みました。そして中学年には今度調べ学習ということが出てきたので、資料の探し方などを中心に索引とか目次の見方、そして、分類番号の持っている意味を知って欲しいなということで、紙芝居やクイズなどで、お話しました。そして、高学年になるとやっぱし何をしていいかなかなか悩むところで、ちょうど、あのポップダリアというのが出たので、そこの付録についているビデオがとってもうまくまとまっていたので、それを参考にそれを見てもらってから、図書館で調べようということで、図書館クイズなどを行ってみました。

この頃になると、ちょうど図書主任の先生も変わられたということで、本の発注とか、だいぶ任せていただけるようになりました。いろいろトラブルも多いんですけれども。

そして、また今年も去年も図書館まつりっていうのがありまして、その時は、今度は生徒たちにしおり作りをしてもらって、私はまた違うことをさせてもらいました。何をしたかというと、図書委員自身のお勧めの本を書いてもらって、それを展示するということをしました。やはり、私たちが薦めるよりも生徒自身が薦めて、「こん

な本面白いよ」といってくれたほうがよかったようで、「あの本借りれる」という声があったのは、うれしく思います。

また、この頃になると、なくなっている本が多いのに気づきました。うちの図書室では、本当に貸し出しは、図書カード１枚なんですよね。そのカード１枚に貸し出しの本を書いて、それがもうすべてなんですが、そこにも記載されていないような本があったり、いろいろその方面でどうしたらいいのかなっということで、とりあえず１ヶ月ごとに図書カードを見直して、遅い人には督促をして、なるべく本の所在を明らかにしていこうと思いました。それと同時に目立つ行方不明の本を一覧表に上げて、先生方にも配布したりして、返却のほうに協力していただきました。

次ですけれども、３年目になって、もっと予約が円滑にできないかと思って、予約カードっていうのを作ってみようと思いました。３段階にわけて、１番上は本人が読みたい本を書いてもらって、２番目のところは本が来たときに本人にお知らせする部分、そして最後はこちらの控えという形で、作成しました。そして他にも従来にもいっしょのように、予約カードのノートというのも作って、図書委員に「この本が返ってきたら教えてね」という形で、とりあえず、題名だけ書いたノートを渡して、なるべく予約がスムーズになるように決めました。

校内本の選書と設置ということなんですけれども、図書館を見渡して、もっと使いやすくするためにはどうしたらいいんだろうと、常々思っていました。先生の方から、理科の本をまとめたらどうかとか、社会の本はまとめたらどうかというお話もありました。でも、やっぱり、皆さん知っていらっしゃるとおり、理科の本でも分類が分かれているのがたくさんありますし、そういった意味でいろいろ悩んでいたんですが、ちょうど調べ学習ということも多くなったので、思い切ってコーナーを作って集めることにしました。本もそれなりに調べ学習の本というのは大きいんですね。それととても書架に入らなくなってきたので、ちょうど大型の本が入るところにまとめて置くようにしました。その時に、本のラベルに色別シールを貼って、その時には、見出し板というのも作って、シールを貼って見出し板も作って、なるべく分かりやすいように努めました。

本もおかげさまで、割と寄付の金額もあるので、購入のほうは他の学校に比べると恵まれていたと思います。それと同時に今度古い本、手に取らなかった本なども、整理もしていかなければならないわけで、そういう本もなかなか捨てれないので、とりあえず、抜き出して、箱詰め、そして箱詰めの際にも、この本はまだまだ読めるぞという本は番号を落としてから、今度はクラスの横に本棚があったので、そこに置かしていただいて、子供がなんか授業の間にあいたときに、本が取れるような形で、本を持っていったりもしました。

それまでは、国語辞典、漢字辞典も書架にずらっと並んでいました。これを並べておくのは、あまりどうかなと思ってコンテナに入れて貸し出しするような形にしました。そして、そこの本棚を開けて、いろんな学習漫画のコーナーとか、国際理解をするコーナーとか、いった風にコーナーをどんどん作っていきました。

そして、３月の末には、簡単ですけれども新しい本だけでも、本の状態を知るために蔵書点検をしました。やはりなくなっている本が多いのには、驚きました。これは何とかしていかなければならないなということで、今後の課題ということになるんですけれども。

今後の課題と対策

今後をどうすればいいかなということで、まず、オリエンテーションですけれども、１年２年やって見て、今度３年目、本当に同じことをといいたいんですけど、全く同じことを繰り返すこともできないので、今度は学年ごとにやる目標を、もっと細かく決めていきたいなと思っています。そうすると、また次の学年に上っていっても繰り返しできるんではないかなと、そういう意味もあって、学年ごとに、もっとポイント、ねらいをつけてやっていきたいなと思っています。

そして、予約サービスの充実化ということですけれども、予約がはいってもやはりカウンターを通らないので、なかなか思うように図書委員の返却のはんこを押しても、「題名を見てね」といっているんですけれども、なかなか確認してくれないので、素通りしてしてしまうほうがとても多いです。「何で私、この人の次なのに」とかいって、苦情が来るのが多々ありまして、何とかしなければならないなと思っているのですけれども。そして、やっぱりなかなかこない本は、督促という形で、上げていけばいいかな、それとも、町立図書館の方からこない分を借りてきたらいいかなとか、いろいろ考えている最中です。

紛失についてですけれども、さっきの予約サービスと続いて、この督促状を作成しているのですけれども、今は返っていないものの一覧をあげて、私は一覧を、返ってこない図書カードを、担任の先生に渡して生徒へ呼びかけてもらっています。でもこの担任の先生のやり方にもいろいろ千差万別があって、「この本を持ってかれ」と

いうことで、図書カードを渡してしまうと、図書カード自体紛失してしまうので、これはよろしくないなということで、今後はそういうことのないようにしていかなければならないなあと、考えているところです。

そして、同時に図書カードも以前は、借りている人だけのカードだけ図書室にあって、借りていない人は教室にあったんですけれど、これではなかなか管理もしづらいし、紛失も多いと思ったので、もうひとつ開いている棚をもらってきて、借りている人のカードの棚もつけて、なるべく紛失がないように努めました。

話が前後しますけれども、この図書カード自体も今まで、ぺらぺらの１枚のものだったんですが、二つ折りにして、ちょっとプライバシーが守れるような形にしたらどうかな、と思って作り変えてみました。

カードの絵も、学年によっていろいろ変えてみたんですけれども、本に親しめるようなイラストを探すのに苦労して、アーノルド・ノーベルの所から本を持っている引き出してきたり、これはちょっと何か本を持っている冊子を探してきたりして、ちょっと工夫してみました。

自分としては、とても満足だったんですけれども、実際使ってみると本の貸し出し数とか、督促状を調べるときに、いちいち開かなくちゃならなくなったので、ちょっと大変だったかなと思いながらいるんですが、しばらくこのまんまでいこうかなと思っています。

そして貸し出しについてなんですけれども、この貸し出しは、１、２、３年生がとても多いんですね。数字で言うと１年生が２０００冊、２年生３０００冊、３年生２０００冊、もう４、５年生ぐらいからがくっと下がってきて、４年生で１０００冊、５年生も１０００冊、６年生で１０００冊、すごく下がっているんです。全体的には１万１７００冊、一人当たり１９，３冊という数字でたんですけれども、とても高学年借りに来る人が少ないので、これはなんとかしなければならないなと、考えているんです。

高学年になってくると、学校行事のことも忙しくなってきて、なかなか図書室に来る暇がないという声が多いんですけれども、もっと魅力的な本を置いたりとか、もっとこんな本があるよというピーアールに努めていって、貸し出しが伸びないかなあと今思っています。

そして、私がもちろん便りを出したり、図書室内でのこんな新しい本があるよという展示のほかにも、生徒自身が、こんな本が面白いよということで展示したら、借りに来てくれるんじゃないかなと思っています。今図書委員には、「ちょっとお勧めの本一冊借りてきてね」ということで、夏休みの課題になってしまったんですけれども。そして、今見直そうかなと思っているところです。

最後に調べ学習、図書室の時間についてですけれども、やっぱり「調べ学習したいので、この本を資料を集めてください」という依頼は、年々増えてきてうれしく思っています。でも現状としては、その本を集めるだけで、なかなかどういうふうに使われたとかいうことまで分かりませんし、集める際にも、やはり、教科のその学習のねらいというものが分からないと、集めにくい面もあるので、なるべく先生との連携をとっていきたいと思います。そこでブックリストを作成して今後こんな本があったらいい、こんな本を買って欲しいということにもつながるようにブックリストを作って、先生の方からもこんな本よかったよということでお聞きして、購入につなげていって、蔵書の方も、そういう形で増やしていきたいと思います。

それとそれと同時にそういうこと、資料を集める、情報を伝えていくことが、まず、私自身の情報が足りなければ何にもならないので、つねにアンテナを高くして、情報をキャッチできるように心がけていかなければと思っています。今、発表する側ですが、こんな研修会があったら、どんどん参加して、自分の加えていきたいなあと思っているところです。

やっぱり学校司書として、ほとんど素人の私がしてきたわけですけれども、それには、やはり仲間っていうか、司書の仲間の助けがなかったら、とてもここまではやってこれなかったと思います。本当に感謝しています。その感謝をまた皆さんにも伝えたいなと思って、こうして、思い切って前に出てお話させてもらったことも、とても感謝しています。こんな私でも一応司書として見てくださっている学校の先生方や、生徒のみんなのためにも、これからも努力をしていきたいと思っています。これで発表を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

高岡市学校図書館司書実践報告―中学校

高岡市立伏木中学校図書館司書　　山崎　朱美　さん

＜はじめに＞

わたしは平成１１年度の採用で、現在５年目になります。平成１１年度、12 年度は市の中心部にある下関小学校、川原小学校の 2 校兼務でした。

平成１３年度からは、一転して、市のはずれにある伏木中学校と千鳥丘小学校の２校兼務になり、今年度からは晴れて伏木中学校専任になりました。どんなにこの日を待ち望んだことでしょうか。各方面でご尽力くださったみなさんには、心から感謝を申し上げたいと思います。

本日は高岡学校図書館司書のあゆみと、毎月行っている司書研修会の内容、また専任司書になっての感想、現在の問題点とこれからの課題などをお話ししようと思います。

高岡市では、平成９年度より、学校図書館司書の配置が始まり、今年で７年目を迎えました。そこで、この７年を第１期～第３期の３つに分けて、学校図書館司書のあゆみを説明します。

第１期（平成９年度～１２年度）

平成９年度、はじめて学校図書館司書が配置され、平成１１年度には、原則３校兼務ながら全校配置に至りました。とともに、学校図書館のネットワーク化が進んだのが第１期です。

高岡市の学校図書館司書の身分は、市の非常勤職員です。月曜日から金曜日までの週５日間、１日５時間の勤務という条件で、平成９年度にまず４名が採用されました。翌平成１０年度に４名が、平成１１年度には５名が新たに採用されました。

そして、３校兼務１２名、２校兼務１名（これが、わたし！）の合計１３名の体制で、市内の小中養護学校・全３８校に配置になりました。

＜夜明け前の図書室＞

この第１期は、「夜明け前」と呼ぶのがふさわしいかと思います。学校図書館司書の配置は、「図書館の夜明け」を象徴するような出来事だと思います。しかし、実際のところ司書のほとんどに実務経験がありません。学校で働くのも初めてで、学校の中の仕組みなどもよくわかりません。学校の図書室がどのようなものなのかも知りませんでした。

一方、学校側もあたらしい職種の人間になにをしてもらえばよいのか、戸惑いのようなものがあったように思います。夜明け前に、闇がもっとも深くなると聞いたことがありますが、その闇の中でお互いに手探りをしている状態ではなかったでしょうか。

図書室の様子はというと、わたしの経験を言わせていただければ、見た瞬間、声を失うような状態でした。まさに夜明け前の様相でした。

＜図書室を図書室らしくする＞

一見したところ、古い本、傷みのはげしい本が目立ちました。昭和２０年代、３０年代の本がまったく使われていないにもかかわらず、棄却がされていませんでした。そのために、部屋全体が埃っぽく、かび臭く感じられました。本の並べ方（＝配架）には、規則性がなく、全体として雑然としていました。書架は新しく、上質のものが入っていましたが、高さがあり（最上段は、大人が手を伸ばして、ようやく届くくらい）、そのため、書架と書架の間は光が行渡らず、暗い印象の図書室になっていました。

次の出勤日からは、マスク、軍手、三角巾、割ぽう着、ジャージの完全防護服（？）で、何が出てくるかわからない戸棚を掃除（ゴキブリのミイラがいっぱい）、古くなった掲示物を取り外し、分類版を水洗いし、書架を磨き、室内の掃除をしました。

以上のようなことは、はじめて配置される学校図書館司書の多くが、経験済のことだと思います。図書室を図書室らしくすることが、わたしたちの最初の仕事になりました。

しかも、このような図書室を３校も担当しているのです。それぞれの学校について、週１日～２日の勤務で、仕事をすすめるのは本当に大変です。仕事の効率も悪いし、時間もかかります。

しかし、その頃は、それを不満に思う余裕などなく、とにかく皆に喜んでもらいたい一心で、「楽しいなぁ」と、まぁ、めちゃくちゃ頑張っていたように思います。幸い、図書主任の先生は、「遠慮せずに、どんなことでも提案してください。」と言ってくださり、わたしも気づいたことは何でも言わせていただきました。そして４月のうちに、背の高い書架は２段式のものだったので、２段に分け、書架の配置をかえました。図書担当の先生方、図書委員会がほんとうによく動いてくれました。こうして、図書室は大きく生まれ変わりました。

しかし、こんなことは一時的なことです。毎日そうじをし、目新しい掲示物をつくっていれば、どんなに汚い図書室も、そのうちきれいになります。「さて、次に何をしたらいいのだろう」というところで、新人研修の案内が来ました。

＜司書研修会について①＞

ここで、私たちが毎月１回行っている「研修会」について報告をさせていただきます。研修会の内容は、司書が皆で検討し計画をたて、学校教育課の了承を得て実施しています。研修会のテーマをみていただくと、わたしたちが仕事の上で何を必要と感じているかが、おわかりいただけるかと思います。ちなみに研修会は勤務日として認められています。

はじめに、司書研修会のあゆみからお話しましょう。研修会は、はじめから用意されていたものではありません。高岡市ではじめて学校図書館司書として採用になった 4 人が、やむにやまれぬ事情から・・・市にお願いして　4 人が集まる機会をもうけてもらった・・・というのがはじまりと聞いています。やむにやまれぬ事情からというのは、人がいなかった図書室というのは先ほども申し上げたように、本当にひどいものなのに、マニュアルなどはなく、何からはじめていいのか検討もつかない状態だったからと聞いています。

このことを機に、高岡市は新人研修の講師と研修会の会場を高岡中央図書館に依頼しました。わたしも、平成 11 年度に新人研修を受けました。図書館の職員の方から、レファレンスサービスついての講義、団体貸出についての説明、読み聞かせやブックトークの実演などを見せていただきました。私の場合、司書資格こそ持っていましたが、実務経験がほとんど無い上に、取得してから相当の年月が経過していたので、この研修は大変ありがたいものでした。

このとき、講師を務めてくださった職員の方には、今も仕事上のさまざまなことを相談しています。そのたびに、良きアドバイスをしてくださいます。団体貸出をはじめ、いろいろな面でバックアップしていただけることを大変ありがたく思っています。

その後、研修のスタイルは、情報交換とスキルアップの 2 本立ての内容に落ち着いていきました。具体的にいうと、計画にある研修のテーマについて担当者を決め、各校での取り組みの様子を報告し、演習を行うというものです。これは今でも基本的に変わっていません。

また、自分が作った、例えば図書だよりや、図書カード、その他参考になるような記事などは、人数分を印刷して持ち寄るようにしました。研修会で技術的なことを学ぶことによって、読み聞かせ、ブックトーク、パネルシアター、エプロンシアターをこなせるまでになりました。事務的なことについても、活発な情報交換のおかげで、一応の共通理解がなされました。夜明けが近くなってきていることを実感しました。

＜高岡学校図書館スタッフ・マニュアル作成開始＞

以上の内容と並行して、「高岡学校図書館スタッフマニュアル」の作成にかかりました。（完成：平成１２年）。作成の目的は、各校でまちまちだった図書の装備、配架、棄却などについて一定の基準を定めるためです。このことが、高岡市の学校図書館の蔵書をデータベース化する際に大いに役立つこととなりました。

＜学校図書館の蔵書データのデータベース化およびネットワーク化＞

平成１２年度、高岡市は学校図書館の蔵書のデータをデータベース化およびネットワーク化しました。これは、第１期の大きな出来事のひとつです。そのための準備は、平成１１年の９月ごろから始まりました。約半年間の準備期間しかありません。まず、やらなければならなかったのは、蔵書点検です。なぜなら、データベースをつくり、それをネットワーク化するとなると、インターネットで、どこからでも検索が可能になります。そのデータに誤りがあっては何にもなりません。データベース化には正確なデータが欠かせないからです。しかし、本格

的な蔵書点検など、高岡市の学校図書館史上、初めてのことです。図書室を閉館し、作業にかかりました。子どもたちには申し訳ないことでした。

当時、勤務していた学校の蔵書は、図書台帳上では１００００冊以上あったのですが、これを職員作業（先生方総出）で、点検しました。それから、司書が１冊１冊に件名をつけ、データ入力用の原本を完成させます。また、校長先生に許可をいただき、購入して２０年以上たつ本、傷みのはげしい本など４０００冊を思い切って棄却しました。これがとても大変でした。本を捨てることは罪悪だと考えておられる先生だったからです。なかなか許可が出ませんでしたが、蔵書点検をした先生方から「捨てたほうがいい」という声があがり、最後は納得してくださいました。それまで、棄却をしてこなかったので、驚くような数字になりましたが（まだ足りないくらい)、ゴミをおいているようなものだったので、処分してすっきりしました。４０００冊の棄却ともなると、棄却印を押し、束ねるだけでも大変な作業になります。それでも、と書担当の先生方が中心になって、先生方が幾度となく職員作業に協力してくださいました。棄却図書の運び出しも先生方、図書委員がバケツリレーのようにして運んでくださいました。こんなことを３校兼務のそれぞれの学校で行ったわけですから、２学期はこれだけで終わりました。

まさに、胸が悪くなるような、目が腫れ上がるような作業でしたが、平成１２年、高岡学校図書館ネットワークが完成しました。ネットワークが完成したおかげで、自校の蔵書管理は随分と楽になりました。他の学校の蔵書がわかることから、学校間貸借がはじまるきっかけにもなりました。

（詳しくは述べませんが、データベース化・ネットワーク化の計画があったら、まず専門家、小杉図書館の参納館長さんに相談されることをお勧めします。）ともあれ、この頃から、高岡の学校図書館が全体としてまとまってきたな・・・と感じるようになりました。

盛りだくさんの第１期をざっと説明しました。このころまでに、司書の仕事として定着していたのは、①図書室の環境整備（掲示物の作成、展示コーナーづくりなど)、②購入図書の選定、③購入した本の受入（データ入力と装備)、④レファレンス、⑤団体貸出、⑥利用指導、⑦おはなし会（読み聞かせ、紙芝居、パネルシアター、ブックトーク)、⑧図書委員会の活動に対する助言、⑨図書だよりの発行、⑩蔵書管理（修理、棄却）などです。もちろん、これにとどまりません。仕事をしていて感じることは、子どもとのコミュニケーション、先生方とのコミュニケーションはかかせないということです。そこから、「今、求められていること」を知ることが多いからです。司書の仕事を理解してもらう絶好のチャンスでもあります。

とはいえ、３校兼務、１日５時間、週５日の勤務では限界があります。とくにレファレンスなど、公共図書館で資料を揃えて回答しようとすると、資料を手渡せるのが何日も先になってしまいます。仕事は年々増える傾向にあり、３校兼務には限界を感じていました。そこへ、思ったより早く朗報がもたらされました。

第２期（平成１３年度～１４年度）

この時期は「夜明け」、つまり、太陽がうっすらと見え始めた時期かと思います。

平成１２年度あたりから、市議会で学校図書館司書の増員を求める意見が度々聞かれるようになっていたのですが、平成１３年度に司書が６名増員され、全員で１９名になり、全員が１人２校兼務になりました。仕事の負担が軽くなったという声が司書から聞かれましたし、総合学習などで図書室を利用することが多くなっていた学校側からも歓迎される出来事でした。

わたしの場合、元々２校兼務だったのですが、増員に伴う異動で、担当校が２校ともかわりました。異動による負担はかなり大きかったです。しかも、はじめて中学校を担当することになりました。

＜中学校担当になって＞

ここから、中学校担当になってからのことを少しお話します。

前任の司書がいたため、図書室の環境は申し分ありませんでした。ただ前年度まで、司書はだいたい週１回、多くても２回しか行っていません。「一部の常連さんのほかは、ほとんど人は来ない」とは聞いていましたが、まったくその通りでした。だ一れも来ません。週１回の勤務では、ことらがどんなに頑張っても、当てにされないということなのだと思います。わたしは、週２～３回行くことになります。そんな現状を変えたいと思いました。まずは、司書が変わったことを知らせるため、廊下の図書返却 BOX（ただのダンボール箱だった）を新しくしました。カウンターの上には、パッチワークのくまのぬいぐるみを置きました。喜んでくれる生徒の姿を思い浮か

べながら・・・
　ところが、次の出勤日。返却 BOX は切り付けられ、くまのぬいぐるみは、後ろ手に縛られていました。いきなり手荒い洗礼を受け、かえって腹がきまりました。

　最初の１年間の貸出状況は、生徒１人あたり１．１冊でした。中学校の３年間に１冊も借りずに卒業していく生徒が大半でした。読書離れは全国的な傾向とはい、なんとも寂しい数字になりました。わたしが、担当する中学校では、学校あげての読書週間というのも無いに等しいですし、小学校と違ってこちらから生徒のところに出向く機会もありません。ことらから、働きかけられることといえば、新着案内など、図書だよりくらいなのですが、みなさんはいかがでしょうか。
　１年目を反省し、２年目に入ってからは図書室が生徒と本との良き出会いの場となるような工夫をしました。図書室にリクエスト BOX を置き、生徒のリクエストを募集。可能な限り、要望に応えました。今の中学生がどんな本を読みたがっているのかを知る、よい機会になりました。リクエストで入った本の一例を言うと、ギネスブック、ターミネーター２、木更津キャッツアイ、スターウォ―ズ、ダレン・シャン、西の善き魔女、十二国記・・・などです。図書室を身近に感じてくれる生徒が少しづつ増えてきました。展示コーナーにも力をいれました。今の生徒たちの傾向として、見た目を重要視する傾向があると思います。自然と足が向くようなコーナーづくりを心掛けました。さらに、コーナーに置く本には一言でも、必ず紹介文を添えました。ひと手間かけることで、これまで動くことのなかったコーナーの本が貸し出されるようになりました。『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』が入ったときには、コーナーの中央に手作りの組み分け帽子を置き、そのまわりに『ハリー・ポッター』シリーズの本をあらすじを添えて展示。関連の本も置きました。中学生になっていてもこの組み分け帽子をかぶりたがる生徒がたくさんいて、盛況でした。こうして、コーナーのまわりに集まっているうちに、本のことが話題になり、その場にいた生徒たちが揃って本を借りていくという現象が、しばしば見られるようになってきました。
　さらに、９月からは緊急雇用ということで、新たに７名の司書が採用され、大規模校に配置されました。従来の司書の勤務日ではない日に来てくださることになり、図書室が毎日開いている、そして、司書が必ずいるという形ができあがりました。
　当初、だーれも来ない昼休みだったのが、今では生徒が昼休み開始の合図と同時に駆け込んで来るようになり、椅子が足りなくて、床に座って本を読む生徒がうちの学校でも見られるようになりました。今では、昼休みには、常に４０～５０人の生徒が来ています。その多くが軽い読書を楽しんでいます。

＜司書研修会②＞

この時期から、わたしたちが力を入れるようにしたことに、ひとりひとりが本の知識を増やし、本を紹介する力をつけることがあります。現在、毎回の研修会に本の紹介文を持ち寄ることにしています。おすすめの本でもよいし、これは、絶対おすすめできません！というのでもよいし、調べ学習用でも、趣味の本でもよいことにしています。
　現在まで約２年間続いています。これらが、そのファイルです。図書購入の際の選書や、レファレンス、図書だよりの作成、コーナー作り、読み聞かせやブックトークの本選びなど、考えていた以上に応用範囲が広く、役立っています。今やわたしたちの財産になりました。
　もう一つは、総合学習、図書室を使った調べ学習を、資料提供の面で支援する立場からレファレンスの力をつけることです。新人研修の際、図書館の職員の方から、レファレンスサービスをしたら、質問内容、経過、回答資料などについて簡単なメモでもよいから、残しておくとよいとのアドバイスを受けました。なぜなら、レファレンスの累積と事例の研究により、どんな資料が必要かわかり、レファレンスコレクションを充実させることができるようになる。それがレファレンスサービスの強化に繋がるからだと伺いました。それならば、２６人の経験を全員が共有していこうということになり、研修会では一人一人がレファレンスの事例を持ち寄ることにしています。これを綴ったファイルもわたしたちの財産になりました。
　お話したようなことから、月に一度の研修会は、ひとりひとりのスキルアップの場として、なくてはならないものです。今日、実践報告をさせていただくということで、高岡市の学校図書館全員を対象にアンケートを行いました。わたしたちは、このように研修会を通じて多くの情報を得て、また、一人一人の経験を全員が共有していくことで、問題意識を高め、成長してきたと考えています。それでも、わたしには「図書室のプロです」と言える自信はありません。まだまだ、学ぶべきことはたくさんあります。

今日のような、機会を作っていただいて思ったのですが、他の市町村の司書のみなさんとの合同研修会を開けるようにならないものかと思いました。実現の道を探ってみたいと思います。

第３期　平成１５年～

学校図書館司書が配置になって７年目の今年、緊急雇用で採用されたみなさんが市の非常勤職員としてそのまま採用され、全員で２６名になりました。そして、児童・生徒数４００名以上の学校１４校で、司書が専任になりました。専任の司書が誕生し、太陽の姿が見え始めた時期に入ったと言えるかもしれません。周りが明るくなり、いろいろな問題も見えてきました。

今年度は、司書教諭の発令の年でもありました。この年を「ノストラダムスの大予言」の１９９９年７の月のときと同じような気持ちで迎えましたが、結局何もかわりませんでした。

４月の研修会では､学校教育課から学校図書館司書と司書教諭の業務について説明がありました｡(資料７）　高岡市から学校図書館司書がいなくなるということは、まず無さそうです。司書と司書教諭は、車の両輪みたいにやっていけばいいのだと思いました。

というのは、学校で、いろいろとたよりにされるのは、うれしいのですが、司書におんぶにだっこ、おまかせします～のところもあるからです。まかせられても困るのです。学校図書館の問題は学校の問題だからです。また、図書室の位置づけ、意識が低いようなところでも司書はたいへん苦労します。このあたりが、課題かなと思います。

＜現場で感じる問題点と今後の課題＞

調べ学習、総合学習の先生方の取り組み方には、時々疑問を感じることがあります。専任になり、図書室を利用する授業をみる機会が増えた今、そう感じることが多くなりました。

中学生になっても、自分の調べるテーマが絞れずにいる生徒はわりといます。そういう生徒は、何時間も無為に時間を過ごすことになります。はじめから、やる気のない生徒もいます。資料を提示する以前の問題です。資料をただ丸写ししているだけの生徒もいます。これでいいのかな・・と思います。

小学生のころから、調べ学習は何回もしているはずなのにどうしてでしょう？ひょっとしたら､「図書室で調べてきなさい」と、図書室の資料がどんなものか下調べもしていない先生にいわれ、クラス全員図書室に送り出され、当然資料は少ししかありませんから、いつもウロウロするだけ・・・そんなことを繰り返させられるうちに、やる気がなくなってしまったのではないか？小学校にいるころ、そのような場面に何度も出くわしたせいか、ついそのように考えてしまいます。事前に必要な資料を知らせてくださる先生と行き当たりばったりすぎる先生との差は開く一方です。

私個人の考えですが、これからは、図書室を使った授業の組み立てとその実習を教職課程の必修科目にするべきではないかと思います。

もうひとつは、図書の紛失が多いことです。専任になってからは、少し減りました。おすすめの本のコーナーにあった本が、全部紛失したこともあります。先生の中には、本がなくなるのは、本が読まれている証拠だからいい、といわれる先生もいらっしゃいます。わたしには理解できません。公共の場としてのマナーを徹底する必要があります。

こういうことで、ストレスを感じることもありますが、わたしはこの仕事が好きです。専任になり、学校の一員になったいう感じがしてきました。夏休み前に行った１年生を対象にした利用指導では、終わりに夏休みにお勧めの本を紹介しました。『夏の庭』と『少年 H』を紹介したのですが、　　静まり返って、話を真剣に聞いている様子に、ぞくぞくしました。実際に紹介した本を借りに来る生徒もいて、司書冥利につきました。

＜おわりに＞

さて、お話してきたように、高岡市では、人がいて、本があってという学校図書館の形は、ここ数年で少しずつ整ってきました。パソコン、プリンター、エアコンなども、約半数の学校図書館で設置済みです。わたしたちは、日々理想の学校図書館を追いかけていますが、そのうしろ姿はまだ見えてきません。学校図書館司書の仕事にも、まだまだ未知の領域があるかもしれません。

これからも、研修会をベースに､「千里の道も一歩から」の思いで、初心を忘れずに自己研鑽に努め、高岡市学校図書館司書全体として、前進していきたいと思います。

高岡市学校図書館司書実践報告―小学校

高岡市立戸出東部小学校図書館司書　　小松　真由　さん

１　高岡市学校図書館司書配置の経過

高岡市で学校図書館司書をしております小松と申します。戸出中学校と戸出東部小学校の２校兼務で勤務しております。今日は高岡市の学校図書館司書を代表して報告させていただくということで事前に全員からアンケートを採りまして、その回答に基づきながら、私の経験を交えて、高岡市学校図書館司書の歩みや取り組み、課題などをお話ししたいと思います。まず、高岡市学校図書館司書配置の経過についてお話しします。

高岡市で学校図書館司書が初めて配置されたのは、平成９年の４月です。非常勤職員として月曜から金曜の週５日間、１日５時間の勤務で３校兼務４名が採用されました。翌平成 10 年度に４名、平成 11 年度に 5 名が増員され 3 校兼務 12 名、２校兼務 1 名の合計 13 名の体制で、市内の小・中・養護学校全 38 校に配置されました。平成 13 年度には 6 名がさらに増員され 19 名全員が 2 校兼務となりました。

去年の平成 14 年 9 月には 7 名が臨時雇用の形で増員。児童生徒数 400 人以上の 14 校に２名の司書が交代で勤務し毎日どちらかの司書がいる常駐という形になりました。今年度平成 15 年 4 月からは、その 7 名も非常勤職員として採用され、14 校の勤務形態は常駐から１人の司書が１校に毎日いる専任になりました。専任の司書の誕生です。ほかの 24 校は 12 名が今も２校兼務で勤務をしています。次は 3 校兼務の時の悩みを少しお話しします。

３校兼務の悩み

平成９年度から平成 11 年度は、すべてが一からという時期でした。資格はあっても実務は初めての者がほとんどでした。また、学校で働くことも初めてのため、学校というシステムにも慣れておらず、事務的な面でも分からないことばかりでした。受け入れる学校側も、初めて来る職種の人間にいったいどんな仕事をしてもらえば良いのかが分からず、お互いに手探りの状態でした。

学校図書館の様子はというと、新刊だけは辛うじて受け入れてある以外は何年も手が入っていなかったり、本の配架にも規則性がなく棚に置かれていたり、昭和 20 年代や 30 年代の本が全く使われていないにもかかわらず棄却がされていないという状態でした。図書館を図書館らしくするというのが、まず最初の仕事だったと思います。

また最初の３年間は３校兼務という体制でした。この３校兼務の一番つらい所は、頼まれたことにすぐに答えることができないということでした。その日中にはどうしても答えることができない要望に対して「また明日。」ではなくて、「また来週。」というふうに言わなくてはなりませんでした。「この資料揃えられるの、また来週来た時になるんだけどいいかな？」というふうに聞くと「じゃいいよ。これ今週中までだから。」というふうに答えられたことが何度もありました。

現在は、専任また２校兼務と、兼務校数が減り、児童により気軽に利用してもらえるようにもなったし、仕事の効率もアップしているし、毎日対応もできるようになったというふうにいい面がたくさんあります。けれども、レファレンスサービスなどが増加していますので、事務的なこととは別な仕事が忙しくなっているので、余裕はやっぱり感じられません。でも同じ学校に行く日が多くなった分、以前よりも多くの要望に答えることができるようになりました。仕事の内容としては良くなっていると思っています。司書としてできる仕事の幅は広がっています。

２　図書館利用

レファレンスサービス

最初の頃、児童は司書というのがどんな仕事をする人かを当然知りません。こちらから声をかけるまで、ぼんやりとしている児童もいました。司書に聞けば教えてくれるという事が分かってくると、「〇〇の本ない？」と私たちの方へ真っ直ぐにやって来るようになりました。こうなると、私たちの前に十何人もの列が着いてしまって

大変です。中には、司書に声を掛けられずに終わってしまう児童というのも出てきます。聞いてきた児童への対応が精一杯で、本を探すことも声をかける事もできずにいる児童に何にもしてあげられない事もあって、どうしたら良いだろうかと悩むこともありました。

また、相手が急いでいる時には、とにかく私たちが本を探して手渡していましたが、時間のある時には探す方法も少しずつ教えながら対応してきました。その甲斐あって最近では、やって来てとにかく聞くというよりも先ず自分で探して見つからない時は司書に相談するという児童も少しずつ増えてきています。高岡市の方針も司書配置当初は、子ども達に本を手渡すというものでしたけれども、今年度からは、情報を手に入れる過程を大事にし、その支援をするという一歩進んだものとなっています。

レファレンスサービスは毎日の仕事です。授業毎に毎時間児童が来るとそれだけで一日の５時間があっという間に過ぎてしまいます。児童が授業で調べ物にやって来る時はほとんどの場合が突然で、その対応はいまでも大変です。初年度は特に蔵書の把握もなかなかできていない所に、急にやって来る為に特に大変でした。しかし次年度からは調べる内容が前の年と同じ物も出てきますので、こういう時は以前の経験が役にたちました。

足りなかった資料は購入しておいたものが役にたったり、前にはその本に出ていた事が分からずに示せなかったものも示せるようになります。対応スピードもアップします。レファレンスサービスは積み重ねが重要な仕事だなと実感しています。

オリエンテーション

調べ学習を上手に進めるには、図書館を上手に使えるようになることが大事です。図書館を上手に使ってもらう第一歩として、また楽しい所であることを知ってもらうために、ほとんどの学校でオリエンテーションを行っています。主に１年生が対象で、借り方、返し方、マナーを中心に司書が行っている所が多いです。学校によっては、希望の学年や全校を対象にしている所もあります。また先生が行っておられる所もあります。

私の場合は、１学期の貸し出しが始まる前に行っています。入学して間もない１年生は長時間座りっぱなしで話を聞くのみというのでは、ちょっと大変なので、できるだけ視覚に訴えるような物を使って簡潔に説明をするようにしています。例えば、これはマナーについての紙なんですけれど、できるだけ目で見て分かる物を使っています。「後かたづけをしましょう。」とか、「カードをかいてね。」とか、こういうものを作って使っています。

また、本の扱いが乱雑なのも気になっています。そこで「本は水が嫌い」とか、「落書きはしないでね」とか、「汚れた手でさわらないようにね」とか「ブラブラ持ったりしないで」「伏せたりしないで」「無理やり取り出したりしないで」、もどし方も「逆さまにしないで」「横にしたりしないでね」とかこういうような物を作って使っています。後はだいたい、借り方貸し方の方法を教えて、本を１冊借りて帰るというような内容にしています。

私の場合は、子ども達をのせていくような話し方がうまくないので、そのへんが課題です。もうちょっと、工夫しなくてはいけないなと思っています。

高岡市立中央図書館による学校図書館支援サービス

児童の調べ物や授業に関する資料が学校にない時、又は学校にある資料だけでは不足しているという時があります。こんな時にお世話になるのが、高岡市立中央図書館です。高岡市内の小・中・養護学校図書館は中央図書館から学校図書館支援サービス、いわゆる団体貸し出しのサービスを受けています。貸し出し期間は一ヶ月。１00 冊までの資料を貸してもらっています。

私達が仕事を始めた当初の学校図書館の蔵書構成というのは分類９、すなわち文学・物語の分野に偏っているという所が非常に多くありました。調べ学習が盛んに行われているにもかかわらず、調べるための本があまり所蔵されていませんでした。年間の予算には限りがありますし、ない本を全部購入するわけにはいきません。どうしても学校にある本だけでは対応しきれずに困っていたところ、中央図書館で団体貸し出しをしていただけるということになりました。

このサービスによって、学校にある資料だけでは対応しきれない様々な質問に答えることができるようになりました。ただ、借りてきた本の紛失が心配ということもありますし、他の学校と重なってしまうと資料が集まらない事もあります。学校によっては中央図書館との距離が非常に遠くて、物流面が不便という悩みもあります。

高岡学校図書館ネットワークと学校図書館間貸借

平成 12 年度に、高岡市では市内の全小・中・養護学校の蔵書データをデータベース化しました。データベース

化とするというと、最先端のシステムに変わるように聞こえるんですけれども、下準備の作業には地道な人間の手作業が必要となりました。できる限り正確なデータを打ち込むために、図書館を閉めきって蔵書点検を行いました。蔵書点検は本来、月に一回、最悪でも年に一回ぐらいは必要なんでしょうけれども、学校というのは、人手も時間的にも余裕がありません。また、定期的に必要な作業であるという認識も薄いようです。図書館始まって以来、初めての蔵書点検だったと思います。学校全体で取り組んだ所や司書が奮闘した所、いろいろとありました。蔵書点検後の入力用の原本作成作業も司書の仕事で大変だったんですが、それも何とか終えることができ、高岡市内の全小・中・養護学校の蔵書はデータベース化され、インターネットで検索ができるようになりました。

そしてこれに伴って学校図書館間での貸借ができるようになりました。学習期間が同じ場合には貸し借りできないこともありますが、平成 14 年度に高岡の中央図書館がデータベース化のために長期の臨時休館に入ったことも影響して、資料不足を補うためのひとつの手段として、利用する学校が増えています。

物流はというと、学校間の公達を利用していますが、公達で運んでもらえる便利さと、すぐには届かない不便さの両面があります。また、あまりにも量が多い時には、本は重いですから、運んでもらう方に申し訳ないなと思います。他にも紛失や破損の心配があります。今は必要ないと、判断して貸し出ししてしまった後で急に必要になってしまったらどうするか？といことも心配な点です。

資料収集

以前は、「困った時にはいつでも図書館にどうぞ」と、声をかけていたんですが、最近では「困った時にはいつでも」とは言えなくなってきています。個々の調べるテーマが、かなり多様化し細かくなってくるに連れて、学校図書館の資料だけではどんどん答えられなくなっているのを感じています。図書館の本というのは、最新情報には弱いものです。新しいことは、しばらくしないと本になりませんし、児童向けの物というのは、更に後にならないと出版がされません。図書館で答えることができる一般的なテーマでも、児童向けの本にはのっていなようなこともあります。この場合は、大人向けのものではやっぱり読みこなすことができませんし、データなどは読み取ることも難しいと思われます。

また、どう考えてもその資料はないというようなテーマもあります。たとえば、地元のことについてなどもそうです。最近では、地元のこともどんどん調べられるようになっています。図書館以外の方法で調べられることも多いようですが、図書館にやってくることもあります。地元の資料、郷土資料というのは、児童向けのものとなると特にありません。大きく「富山県」とか「高岡市」とかいうような資料ならばまだありますが、地区限定となるとほとんどありません。たとえば、戸出で採れた野菜がいったいどのぐらい、どこに流通しているのかを知りたいという質問を受けた事がありました。まず、戸出限定の農業や流通に関する資料というものがありませんでした。辛うじて高岡でどれくらいの物が採れているかという統計は、あったのですが、それがどこにどれぐらい流通しているのかが、はっきりわかる物はありませんでした。殆ど答えることができなかった事例のひとつです。

調べ学習や総合的な学習というものは、「図書館の本で調べて終わり」というような学習ではないと思いますが、それにしても多様な資料が必要となってきていることは間違いありません。いかにしてこれから資料を収集して提供していくのかというのは課題です。

図書館における問題点や課題点

調べ学習や総合学習が多く行われるようになり、図書館の利用自体は増えていますし、使い方というのは上手になって来ているなと感じているんですが、あまり変化が見られなくて気になっている面もあります。それは、児童達が自分の調べるテーマが絞れていないまま図書館に来ることが多いということです。これがまず第１点目です。自分が何を調べたいのかが解っていないので、こちらからいろいろ問いかけても、どんな本を必要としているのかが児童自身にも分らないのです。司書としては非常に対応に困ります。どのように支援したらよいのか戸惑います。レファレンスをしているのか、その児童のテーマを絞っているのかが分らなくなる時があります。これは私達司書の仕事ではないなと思いながら、現状は変わらないまま毎日児童はどんどんやって来ますので、ついつい対応してしまいます。児童のテーマを絞ってどのように指導するかというのは、あくまでも先生方の仕事です。私達はその過程でこういう資料が欲しいと、児童が言って来た時に支援をさせて頂く立場なのです。この現状は先々のことを考えても、良い傾向であると言えないと思います。

司書は指導をする立場にはないということもあるのですが、先生方には調べ学習での図書館利用の実態をもっ

ときちんと把握していただきたいと思うのです。学校図書館を盛り上げる主体となるべきは先生方なのです。

第２点はマナーの悪さ、紛失、無断持ち出しが多い現状がなかなか改善されない事です。本の扱いの悪さが、まず気になります。新刊で入った本もあっという間に壊れてしまって、
がっかりする時があります。無断持ち出しが多いことも気になっています。すぐ返すからというような気持ちで持って行くんでしょうけれども、使い終わると持ち出している事をコロッと忘れてしまうようで、返し忘れてしまい、そのままその本がどこに行ったかわからなくなってしまうようです。無断持ち出しは紛失に繋がります。調べ物というのは、次の年も同じテーマでやって来ることが多いので、その時にこの本使おうと思って探すと本が無くて対応ができず非常に困ります。どのようにしたら改善されるのかというのは、皆が頭を悩ませているところです。もし効果的な方法をご存知の方がいらっしゃいましたら、ぜひ参考にしたいのでお教え頂きたく思っています。

第３点目は、急な来館が非常に多いということです。高岡の司書達はこのことに一番困っています。図書館で受けられるいろいろなサービス、たとえば高岡市立中央図書館の学校図書館支援サービスや、学校図書館間貸借のようなサービスなどを利用して授業をなさった経験のある先生方というのは、次にもまた図書館を頼りにして下さいます。なかには、少しずつ計画的に利用して下さる先生が出てきたり、事前に知らせて下さったりする先生も出てきます。しかし、これは現段階では極少数派です。時間があれば揃えられる資料もありますし、事前に聞いておけば、もっと素早く対応できるという時もあります。急に来られるとなかなか答えることができなかったり、時間が掛かったりするという事は、先生方もきっと経験でわかっておられると思うんですけれども、急に来られるという現状にはなかなか変化が見られません。

また、揃えることができない類の資料というのもあります。無いことを事前に伝えられていたら、何か違った情報収集手段を先生は考えられると思うのです。また、急に来られる場合は、司書は学習の目的も事前には伺っていないのですね、何も伺っていないので、どういうことが目的なのかがわからぬまま、児童からの「環境！環境､環境！」とか､「車椅子の本！」とか､「沖縄の・・・」とか「水、水！」というひと言だけを頼りに、できる限りの事をあれもこれもというふうにしてしまいます。

調べて学ぶというのは、ここまで手取り足取りしてしまっていいのかなと迷いながらも、言っている事に答えられそうな本を探します。児童達には、調べることを嫌になって欲しくないなと思いますし、また次も図書館を頼って欲しいなと思ってしまうので、ついつい色々と先回りをしてしまいがちになります。でも調べ学習で学ばせたい事を後で先生に伺ってみると、調べる事よりも人と話しをして聞く事が目的だったりとか、ピンポイントの事柄ではなく幅広いものでも良かったり、調べるということ自体が目的であることもあります。それを聞くともっと違う対応をしたほうが良かったなと思うことがあります。

学習の目的によって、司書の支援の仕方も変わってきます。先生からどのような支援をして欲しいかというのを事前に伺っていないと、何をどのようにどこまで支援してよいか
が分らずに、どこまでが自分達の仕事なのかが司書自身の中でもはっきりせず、困ります。るんです。司書に求められている支援とは、一体どんな支援なんでしょうか？

私は個人的なのですが、テーマが解決しないというのも調べた一つの結果であって、なぜ解決しないのか、ではどうしたら解決できるのかというのを自分で考えていくというのも、学ぶということだと思っています。しかしこれは、先生方がどのような学習をさせたいと考えておられるかということとは、イコールではありません。これはあくまでも私個人の考え方です。

司書の支援というのは個人の考え方に基づいて行われるべきではなくて、学校図書館の場合は学校なり、先生なりの方針に沿って、利用する人から求められた事に対して答えるべきであると思っています。ですから、図書館を使った学習に関する学校の方針がはっきりしていない、先生方からこうして欲しいという要望を事前に伺わせてもらっていないということは、本当は司書は支援のしようがないと思うのです。でも、児童達はこちらの事情には関係なくどんどんやって来ますので、方針が無いから動けませんと言う訳にもいかず、司書は個人の考え方に基づいて、学習の目的を想像しながら児童に対応するしかありません。司書が仕事の仕方について迷っている原因は、ここにあると思います。この辺の意識が学校側から変わってくると､司書としては非常に支援がしやすいのですが、待っているだけではなかなか現状は変わりません。司書側からもなにか働きかけをしていかなければならないなと思っています。

３・読書相談とブックトーク

調べ物の時だけではなくて、日々の休み時間などの利用でも様々な質問を受けます。「何か面白い本ない？」というのが、多い質問の一つです。どんな本を求めて聞いてきているのかなどの話をしながら探っていって、いくつかの本を紹介します。場合によっては自分が小学校時代に読んで面白かったなと感じた本を薦めることもあります。

たとえば、「ガンバとカワウソの冒険」という本があります。この本は私が小学生時代に読んだ本ですから、昔に出版された物です。昔に出版された本というのは今よりもちょっと装丁が地味だったり、字も細かかったりするものが多いです。児童達というのは今風の見た目のものを好む傾向にあります。また実際に薦めた時には、学校にあった物はハードカバーの愛蔵版で、購入して何年もたった物でした。見た目は、古い感じのする本でした。私としては自信をもって薦めたのですが、児童はパラパラと見て、「今日はこれにするわ」と、いつも借りていく本を借りて行きました。レファレンスサービス失敗です。ちょっとがっくりきました。

私の勤務する小学校では、読書週間の行事として高学年には各クラス毎にブックトークを行っています。このブックトークの時にこの本の紹介に挑戦してみました。すると全然借りられていなかったこの本が、借りられていくようになりました。ほかにもカバーが掛かっていないためになかなか手に取られていなかった本なども紹介したんですけども、こちらも借りられる様になりました。少々装丁の古い本でも、どんどん借りられて行くようになり、ブックトークの効果を感じました。それと同時に、普段の紹介の仕方がいかに本の面白さを伝えきれていないかということを実感させられました。

紹介した本を読んでみて面白いというふうに感じてくれた児童というのは、また紹介してと言ってきます。そして、今度は私が紹介した本をじゃあ読んでみようかなと手に取ってくれるようになります。ブックトークがきっかけで、私の薦めるものに対しても信頼性が少し上がったのかなと思いました。司書という仕事は相手との信頼関係が大事だなと実感した出来事です。

私の初めてのブックトークの経験というのは、教科書に出ている作者の本で、学校にあるものを紹介するものでしたが、ブックトークの方法があまり分かっていなかったこともあって、「こういう本があります」と、いうようなことを知らせる事しか出来なくて大失敗でした。、紹介後に別置した棚にそのままズラッと本がならんだままで、全く誰も手を付けず全然貸し出しにも繋がりませんでした。その後研修会でほかの司書の実演を見せてもらったことで、どうしたらよいかというのが少し見えてきました。ただ、失敗の経験があったので、なかなか再挑戦する勇気が有りませんでした。

平成 13 年度の夏休みの前に先生から「夏休みにお薦めの本を紹介して、あなたが昔読んだ本で面白かったものでもいいし」という依頼がありました。先程紹介した本を含む人生２度目のブックトークをする機会がやって来ました。前回の失敗を踏まえて、私は念入りに準備をすることにしました。自分なりに悩みながら、シナリオもビッチリと作って行きました。その本のどこを見せ場にしてどうやって盛り上げて、いかに読みたいというふうに思わせる話しをするかというのを考えて、紹介する本の全てを読み直ししました。できるだけ顔を見てしたいなと思いましたので、シナリオも全部おぼえることにしました。でも 40 分全部を覚えるとなると、やっぱり大変で、準備に非常に時間がかかり、とても大変でした。

ブックトークが終わってみるとどの本も読んでみたいというふうに言ってもらえて、貸し出しも増えました。夏休みを過ぎて２学期になっても覚えていて、まだずっと借りられていました。友達同士で「もうこれ読んだ？」というような話をしている姿をみると、どんなに準備が大変でもこれだけ効果があれば甲斐があるなとうれしくなります。次もがんばろうという気持ちにも繋がります。

また図書館で新刊の受け入れをしていると、児童が周りに集まって来て新しい本を見て、「この本もまた紹介するが？」「どんな本？」「面白い？」というような事を聞いて来ると
ブックトークを楽しみにしてくれているのかなと思います。次は何を紹介しようかなと、私も楽しみに思えるようになってきました。私のブックトークでの課題点というのは、オリエンテーションの場合と同じなのですが、講義調になりがちで、40 分間じっくりと聞くシナリオになってしまうということです。他の司書の実演を見せてもらっていると、ショーのように楽しいものもたくさんあります。そんな楽しい感じのブックトークもやってみたいなと思っています。

また、シナリオをビッチリと作りこんでしまうので本の交換が効きません。ひとつ崩れると多分建て直しが効かないと思います。子供達が乗ってこない時や集中しきれない時には、思いきって一冊バッと替えられるくらいの柔軟性と本の知識が欲しいと思います。他に朗読というものも重要だなと思うので、朗読の力ももっとつけたいなと思っています。

４・読み聞かせ

私の勤務する小学校では、読書週間の行事として、低・中学年には読み聞かせを行っています。各クラス毎に30 分から 40 分位のプログラムで行っています。テーマを組むために中央図書館から借りてきた本で行っていた年もあったんですけれども、去年は閉館中ということもあって学校にあるものだけで行いました。中央図書館のように所蔵の本が多くないので、テーマは組めなかったのですが、良い点もありました。それは終わったらその本がすぐ借りることが出来るということでした。特に低学年では「借りたい。借りたい」と言って、取り合いになってしまうほどの人気となりました。小学校に上がると絵本よりも物語の本のほうをよく読むようになるのか、絵本の貸し出しというのは普段は思っているほど多くないのが現状です。でも子ども達というのは、読んでもらうのは大好きです。読み聞かせをすると大変喜んでくれます。また、絵本も物語の本と同じように装丁が地味な本というのはやはりあまり貸し出しされないという傾向にありますが、読み聞かせをすると反応も良くて貸し出しも増えます。いろんな本と出会って欲しいと思うならば、どんどん読んであげるというのもひとつの方法だなと感じています。

４年生位になると、「4 年になるのに絵本読むのもな」という児童も出て来るのですが、去年は昔話や、怖い話を選んで読んでみました。読み始めるとどんどん引き込まれていくのが分かりました。最初は「え～」と言っていた人も真剣に聞いていました。去年は中学校でもブックトークの流れで写真絵本を一冊読み聞かせしたのですが、中学校３年生でも結構すんなりと聞いてくれました。大人の私でも研修会などで実演を見させてもらうと楽しめますから、読み聞かせは幾つまでしか出来ないということはなくて、幾つになっても楽しめるなと感じています。機会があればどんどん読みたいなと思っています。

５・ストーリーテリング

本やお話の面白さを伝える方法には読み聞かせ、ブックトークの他にストーリーテリングもあります。これについては、高岡の司書たちはボランティアの方々に協力をしていただいています。私たちは学校図書館司書初任者研修会というのがあったのですが、私たちは、そこで「高岡おはなしの会」と出会いました。高岡おはなしの会はストーリーテリングを勉強し、ボランティアでお話の配達もしておられる団体です。初任者研修会の折りに、実際にお話を聞かせていただきました。お話の数々に感動して、これはぜひ子供たちに聞かせたいと早速学校側に働きかけて、会の方々を招いての「お話の会」を実施する学校が出てきました。実施した学校の評判を聞いて、さらに実施する学校が増えました。年間行事に組み込んだり、全クラスごとに実施している学校もあります。会の方々はいつも快く引き受けてくださって、とっても嬉しく思っております。私の勤務校でもここ数年続けているのですが、子供たちはろうそくに火がともるとスーッとお話の世界に引き込まれていきます。自分のクラスに来ていただいた方にまたお会いできるのを、とても楽しみに待っているという児童もいます。とても楽しみな行事のひとつとなっているようです。

６・司書研修会

私たちは、毎月１回研修会を行っています。研修会の内容は司書が皆で検討して、計画を立てて学校教育課の了承を得て実施しています。研修会は勤務日として認められております。

では、司書研修会の歩みからお話しいたします。研修会は、初めから用意されていたものではありませんでした。高岡市で初めて学校図書館司書として採用になった四人が、マニュアルなどは何もなく見当もつかない状態だったことから、市にお願いして四人が集まる機会を設けてもらったというのが始まりだと聞いています。このことを機に高岡市は、初任者研修の講師と研修会の会場を高岡中央図書館に依頼しました。中央図書館の職員の方からレファレンスサービスについての講義、団体貸し出しについての説明、読み聞かせなどの実演を見せていただきました。実務経験がなかったので、この研修はとてもありがたいものでした。

その後、研修のスタイルは情報交換とスキルアップの二本立ての内容に落ち着きました。具体的には、計画にある研修のテーマについて担当者を決め、各校の取り組みの様子を報告し、演習を行うというものです。これは今でも基本的には変わっていません。また自分が作った図書便りや図書カード、その他参考になるような記事などは、人数分を印刷して持ち寄るようにしました。

それと並行して、高岡学校図書館スタッフマニュアルを作成しました。長い間各校でまちまちだった図書の装備、配架、棄却などについて一定の基準を定めたのです。先ほどお話ししたデータベース化の作業でもこれが役に立って、高岡の学校図書館ネットワークが完成しました。このころから高岡学校図書館が全体としてまとまってきたなと思っています。

平成 13 年度からは場所を高岡市教育センターに移して研修会を開いています。現在私たちが力を入れているのは、一人ひとりがさらに本の知識を増やし紹介する力をつけることです。これはレファレンスの力にもつながります。そこで、毎回の研修会に本の紹介文を持ち寄ることにしています。全体を二つのグループに分けて、隔月で提出するようにしています。お勧めの本でもいいですし、これは全然お勧めできませんというものでもいいですし、調べ学習用でも読書のための本でも良いということにしています。約二年間続けているのですがこのファイルも結構厚くなってきました。図書購入の際の選書やレファレンス、図書便りの作成、コーナー作り、読み聞かせの本選び、ブックトークなど、考えていた以上に役に立って、私たちの財産といえるものになっています。

さらに今年度からは、増えた本の知識を使って毎回の研修会で 2 人から 3 人がブックトークをしています。入って間もない新人の方も堂々としたブックトークを見せてくださり、私たちにとってもとても良い刺激になっています。

もうひとつは総合学習、図書館を使った調べ学習を資料提供の面で支援する立場から、レファレンスの力をつけることです。初任者研修の際、中央図書館の職員の方からレファレンスサービスをしたら、質問内容、経過、回答資料などについて簡単なメモで良いから残しておくとよいとのアドバイスを受けました。なぜならレファレンスの累積と事例の研究によりどんな資料が必要かわかりレファレンスコレクションを充実させることができるようになる、それがレファレンスサービスの強化につながるからだと伺いました。それならばと、26 人の経験を全員が共有していこうと、一人ひとりがレファレンスの事例を持ち寄ることにしています。これも私たちの財産となっています。

月に一度の研修会は、一人ひとりのスキルアップの場としてなくてはならないものとなっています。今日実践報告をさせていただくということで高岡市の学校図書館司書全員を対象にアンケートを行いました。その結果、特によかったという評価を受けた研修会のテーマは、展示に関すること、読書週間の取り組みと、ブックトークです。

私たちはこのようにして、研修会を通じて多くの情報を得て、一人一人の経験を全員で共有していくことで問題意識を高めて成長してきたと考えています。

しかし、この研修会の持ち方にも問題点があります。26 名という大所帯となってしまったために、現在はいまひとつまとまりに欠けてしまっているように感じています。また多くの人の話を十分に聞く時間が作れません。他校での実践や他の司書の取り組みには刺激を受けますが、今は少しでも中身の濃い話し合いにとグループ研修をしているために、全員の話を聞くことができなくなってしまっています。これは皆が、残念に思っていることでもあります。また課題だと思っていることについて、いろいろと話し合いをするのですが難しい問題が多く、（たとえば、選書の基準について、レファレンスの対応レベルはどれくらいまでするか、紛失をどうするか、もっとプライバシーを守るにはどうしたらいいか、予約の仕方をどうしたらうまくいくだろうか、などです。）一日では結論が出ません。煮詰まらないまま終わって、先送りをしてしまうことがあります。

難しい問題が多いので、簡単に結論が出ないのも当然の話なんですけれども、話し合うたびに「これはやはり問題だね」というふうに確認するだけのレベルのままでは、いつまでたっても先には進みません。少しずつでも前に進むためにはより広く深く研修会を持てるように今一度研修会の持ち方について、検討する時期にきているかなと思います。

高岡の学校図書館司書は以上のような経過を経て、今お話ししたような仕事をしております。課題や不安な面もたくさんありますが、皆この仕事が好きなので学校図書館をよくしていこうと日々努力をしている次第です。他の市町村等の取り組みや現状なども伺わせてもらえればうれしく思います。